

## 問題1

今回の検定テーマは「家康公と家臣団 ～戦乱の世から江戸の平和へ～」です。一般的に、戦乱の世の始まりといわれる騒乱を何というのでしょうか？

- (1) 応仁の乱 (2) 壬申の乱  
(3) 中先代の乱 (4) 保元の乱

## 解説

室町時代の中期、幕府管領家の島山家と斯波家の家督争いに8代将軍 足利義政の跡継ぎ問題が絡み、応仁元年(1467)、京都で幕府を二分(東軍と西軍)する争乱が起きました。戦いは全国に波及し、松平郷(豊田市)から岩津城(岡崎市北部)に進出していた松平3代 信光は、東軍の三河守護 細川成之の命を受け、西軍の一色氏に属する安城城(安城市)を攻略、子の親忠に与えています。安城松平氏の誕生です。応仁元年に起きたことから一般に「応仁の乱」と呼ばれ、以降、幕府や将軍の権威は急速に弱体化、戦国時代へと繋がっていきます。この戦乱の世を収めたのが、安城松平家6代にあたる家康公でした。



真如堂縁起絵巻より「応仁の乱」部分  
(真正極楽寺 蔵/京都市左京区)

出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題2

家康公が生まれた時代。幕府はどこにあったでしょうか？

- (1) 江戸 (2) 小田原  
(3) 鎌倉 (4) 京都室町

## 解説

家康公が誕生した天文11年(1542)、幕府の将軍は第12代 足利義晴でした。鎌倉幕府、後の江戸幕府と並び、室町幕府と呼ばれた時代です。室町幕府初代将軍 足利尊氏は、暦応元年(1338)征夷大将軍に補任され、京都に新たな武家政権を開きました。尊氏邸は二条に構えられましたが、永和4年(1378)、孫の3代将軍 足利義満が室町今出川に本邸を移転し、ここが幕府所在地となりました。源氏の「鎌倉殿」に倣い、以後、足利将軍は「室町殿」と呼ばれます。庭園美を極めたこの室町第は「室町御所」とも「花の御所」とも称され、政治、文化の中心でしたが、応仁の乱で焼失。その後、縮小して再建が繰り返されたものの、永禄2年(1559)13代将軍 義輝の二条御所造営・移転により廃されました。



洛中洛外図より「花の御所」部分 出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題3

家康公が生きた戦国時代を表す言葉としてふさわしくないのはどれでしょうか？

- (1) 下剋上 (2) 弱肉強食  
(3) 天皇親政 (4) 独立地方政権

## 解説

明応2年(1493)、「明応の政変」が起こりました。幕臣である管領の細川政元が主君である第10代将軍 足利義植を武力で追放し、足利義澄を11代将軍に擁立。政権を篡奪して事実上の最高権力者となった事件です。地位の下の者が上の者にとって代わる究極の「下剋上」を世に示したものでした。以後、幕府の中央政権としての権威と機能は大きく低下し、織田氏のように守護大名の家臣(守護代)だった者、松平氏のように国衆だった者が下剋上で戦国大名となっていくます。今川氏のように守護大名から戦国大名に転化した者も含め、彼らは幕府に頼らず、実力で領国支配を行う独立地方政権を築き、互いに領地を奪い合う弱肉強食の争いを続けたのです。



下剋上を代表する戦国武将  
斎藤道三の居城だった稲葉山城  
(後の岐阜城/岐阜市)

## 問題4

家康公の生きた時代、中国にあった統一王朝は何でしょうか？

- (1) 元 (2) 後漢 (3) 唐 (4) 明

## 解説

日本と中国との交流は古く、弥生時代の西暦57年、後漢の初代皇帝 光武帝が倭奴国に印綬を授けたとの『後漢書』(中国の歴史書)の記述を初見に、古代より政治・経済・文化などあらゆる面で日本は中国と深く関わってきました。多くの国家が盛衰を繰り返してきた中国ですが、家康公が生きた16世紀中旬から17世紀初旬に中国に存在した王朝は「明」でした。明は、足利義満が室町幕府3代将軍に就任した正平23年(1368)に建国され、徳川3代将軍 家光の時代の寛永21年(1644)までの277年間存続しました。秀吉による「朝鮮出兵」後、家康公は明・朝鮮両国との和平交渉を進めますが、明とはついに国交を回復することはできませんでした。しかし、朱印船貿易を通し、明の上質な生糸や絹の輸入は行うことができました。



明の銅銭「永樂通寶」  
室町時代に大量に輸入され、江戸時代当初まで日本で流通した。

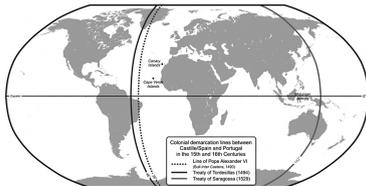
## 問題5

日本の戦国時代、ヨーロッパはどのような時代だったでしょうか？

- (1) 日本と同様に各国が群雄割拠して争う戦国の時代
- (2) イスラム世界に十字軍が進攻する宗教戦争の時代
- (3) 蒸気機関が発明された産業革命の時代
- (4) 列強が世界に進出した大航海時代

## 解説

明応2年(1493)の「明応の政変」の前年、ヨーロッパでは、探検家コロンブスによる新大陸発見という歴史的な出来事が起こっていました。ポルトガルとスペインは、15世紀にイスラム勢力をイベリア半島から駆逐(レコンキスタ)すると、国王を中心とした中央集権制度が他国に先駆け確立し、造船技術の向上と羅針盤の伝播を追い風に世界に進出しました。新たな信者獲得を目指すローマ法王庁の後押しもあり、1494年には両国で世界を二分割する「トルデシリャス条約」を締結。スペインはアメリカ大陸へ、ポルトガルはアフリカを経てアジアに植民地政策を展開し、日本には家康公が誕生した翌年(1543)に辿り着きました。



大西洋上で世界を二分割した「トルデシリャス条約」と、35年後にアジアにおける境界線を定めた「サラゴサ条約」の境界線。

## 問題6

天文11年(1542)12月26日の午前4時頃、○の年、○の日、○の刻に生まれたと伝わる家康公。○に当てはまる十二支は何でしょうか？

- (1) 丑
- (2) 午
- (3) 辰
- (4) 寅

## 解説

「乱世を収める強い子を授かりたい」。家康公の父 広忠とともに鳳来寺(愛知県新城市)に参籠し、峯薬師に祈願した於大の方の祈りが通じ、天文11年12月26日午前4時頃、寅の年、寅の日、寅の刻に元気な男の子が岡崎城で産声をあげました。後の家康公です。鳳来寺の御本尊は薬師如来で、十二神将とよばれる12体の仏尊に守られていました。家康公が生まれたとき、鳳来寺では、十二神将のうち寅の守護者である真達羅大將が消え去り、家康公が亡くなると像が戻ったことから、家康公は真達羅大將の化身だとされました。後にこうした逸話を聞いた3代将軍 家光は、ここ鳳来山に東照宮を建立しています。



鳳来山東照宮(愛知県新城市)

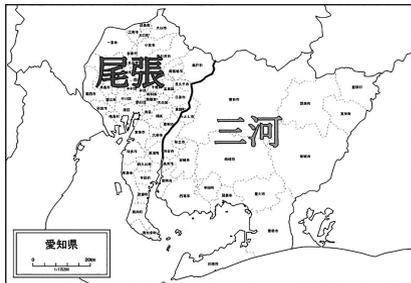
## 問題7

家康公が生まれた三河国みかわのくには現在の何県でしょうか？

- (1) 愛知県 (2) 岐阜県  
(3) 静岡県 (4) 東京都

## 解説

三州さんしゅうとも別称される三河国は、古代日本りつりょうせいの律令制で定められた広域地方行政区画である「五畿七道」(畿内5ヶ国と東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道)のうち東海道を区分され、全国60余州(国)のひとつとして長く呼称されてきました。しかし、明治4年(1871)の廃藩置県により、三河国の全域と尾張国知多郡ぬかが額田県と改められ、県庁は岡崎に置かれました。また、知多郡を除く尾張国は名古屋県となりましたが、翌年(1872)4月、名古屋県が愛知県と県名を改めると、同年12月に額田県は愛知県に合併となり、三河は愛知県の東部地方を指す地名となりました。この尾張と三河の合併により、戦国の三英傑は全て愛知県の出身となったのです。



愛知県 図／尾張と三河

## 問題8

家康公が生まれたのは三河国のどの城でしょうか？

- (1) 安城城あんじょう (2) 岩津城いわづ  
(3) 岡崎城 (4) 山中城

## 解説

岡崎城は、三河守護 仁木義長の守護代にきよしながだった西郷氏が康正元年(1455)に現在の岡崎城の地に砦(出城)を築いたのが最初とされます。後の大永4年(1524)、安城城の松平7代 清康が西郷氏の支城の山中城を攻略して岡崎に入り、拠点といてを安城から岡崎に移しました。当時、清康が入城したのは西郷氏の居城であった乙川南岸の明大寺の城みょうだいじ(平岩城)といわれ、後に川の北岸の龍頭山の出城(現在の岡崎城)に拠点おとがわを移し、松平家の新たな居城としてふさわしい整備拡張を行いました。天文11年(1542)、家康公は清康の孫として(8代 広忠の嫡男として)ここ岡崎城で誕生しました。岡崎城は、江戸時代、神君家康公生誕の城として神聖視され、譜代大名が歴代の城主を務めています。



岡崎城(愛知県岡崎市)

## 問題9

家康公には祖父の松平清康と同じ幼名がつけられました。何という幼名でしょうか？

- (1) 亀千代 (2) 鶴千代  
(3) 竹千代 (4) 松千代

## 解説

竹千代とは、松平3代 信光の子 親忠に始まる安城松平家の歴代嫡男に付けられた幼名です。天文12年(1543)2月26日、三河大浜(碧南市)の時宗の寺院 称名寺で連歌の会が催されました。発句の「神々のながきうき世を守るかな」に対して、家康公の父 松平広忠は「めぐりはひろき園のちよ竹」と詠み、住職である第15世一天和尚(其阿上人とも)が、家康公の幼名を竹千代にすることを勧めたとの伝承もあります。

家康公が徳川に改姓(復姓)し将軍となったことで、以降、徳川将軍家の嫡男の幼名として継承されてきました。



称名寺(愛知県碧南市)

解答… (3)

## 問題10

家康公の母 於大の父はだれでしょうか？

- (1) 織田信秀 (2) 斎藤道三  
(3) 戸田宗光 (4) 水野忠政

## 解説

家康公の母、於大の方は天文10年(1541)、三河岡崎城主 松平広忠に嫁ぎました。彼女の父は、松平家と境を接する三河刈谷(刈谷市)城主であり、隣国 尾張の知多半島北部の緒川城主(愛知県知多郡東浦町)でもあった水野忠政です。当時、三河は東の今川家、西の織田家に挟まれ、松平家・水野家ともに駿河・遠江の太守 今川義元の庇護を受けながらも、なんとか独立を保っている状況でした。それまでも両家は婚姻を通して関係を深めており、忠政は於大の他にも、形原松平家広と松平家重臣の石川清兼に娘を嫁がせて松平家との連携強化を図っています。江戸期には、水野家は家康公の母 於大の実家として重用され、7名の老中を輩出、5家が大名として明治に至っています。



水野忠政 肖像/部分  
(名古屋市博物館 蔵)

出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題11

家康公が生まれた翌年に、日本のある島に漂着したポルトガル人から鉄砲(火縄銃)が伝わりました。ある島とはどこでしょうか？

- (1) 奄美大島 (2) 佐渡島  
(3) 種子島 (4) 対馬島

## 解説

日本への鉄砲伝来については、薩摩国島津氏の家臣 種子島久時が僧の南浦文之に編纂させた『鉄炮記』に詳しく記されています。これによれば、天文12年(1543)8月25日に、100人ほどの異人が乗った大船が種子島の南端の浜に来着したとあります。引見した島主の種子島時堯(久時の父)が乗船していた明の儒者に筆談をさせたところ、ポルトガルの商船であることがわかりました。鉄砲の実演を見た時堯はその威力に驚き2挺を買い求めると、火薬の調合法を家臣の篠川小四郎に、鑄造法を関(岐阜県関市)から移住していた刀鍛冶八板金兵衛清定に学ばせたとあります。種子島で製造された鉄砲は、短期間に各地に広がり、その後の日本の戦い方を大きく変えていったのです。



種子島時堯 像  
(鹿児島県西之表市)

## 問題12

家康公が生まれた7年後にはスペインからキリスト教が伝わりました。キリスト教を伝えたスペイン人宣教師はだれでしょうか？

- (1) ヴァリニャーノ  
(2) フランシスコ・ザビエル  
(3) マルティン・ルター  
(4) ルイス・フロイス

## 解説

日本に初めてキリスト教を伝えたのは、イエズス会宣教師 フランシスコ・ザビエルです。1506年にスペインに生まれ、カトリック教会の優秀な聖職者に成長した彼は、1540年、インドのゴアに出立。1547年にマラッカで日本人のヤジローに出会ったことから日本での布教を決意し、天文18年(1549)、ついに鹿児島島に上陸しました。彼は日本滞在2年余のうちに500人以上に洗礼を授けたといい、ゴアのイエズス会に宛てた手紙のなかで、「日本人は、私がこれまで出会ったなかでもっとも優れた国民である」と記しています。“東洋の使徒”と讃えられるザビエルは、元和8年(1622)にカトリック教会の聖人に挙げられています。



聖フランシスコ・ザビエルの肖像  
(神戸市立博物館 蔵)  
出典：ウイキメディア・コモンズ

## 問題13

天文16年(1547)、6歳(数え年、以下同様)の家康公は尾張の織田家に人質に出されました。このとき、信長は何歳だったのでしょうか？

- (1) 6歳 (2) 14歳  
(3) 22歳 (4) 30歳

## 解説

「武田信玄は21歳。上杉謙信は12歳。織田信長は8歳。後の平民太閤、豊臣秀吉はしなびた垢面の6歳の小童だった。この年、天文10年一」

作家 山岡荘八氏の大河小説『徳川家康』(全26巻)、第1巻の始まりの文章です。家康公は天文11年(1542)、織田信長は天文3年(1534)の生まれで8年の歳の差があります。尾張守護 斯波氏の守護代の分家である織田信秀の嫡男として勝幡城(愛知県愛西市・稲沢市)に生まれた信長は吉法師と名付けられ、天文15年(1546)、元服して信長を名乗ります。家康公が織田家の人質となったのは翌年のこと。6歳の竹千代と14歳の信長の出会いは果たしてあったのでしょうか。



父 織田信秀と母 土田御前に抱かれた吉法師 像  
(勝幡駅前/愛知県愛西市)

## 問題14

2年後、人質交換で駿府の今川義元の許に移った家康公を指導・教育し、人間形成に大きな影響を与えたといわれる人物はだれでしょうか？

- (1) 太田道灌 (2) 太原雪齋  
(3) 沢庵宗彭 (4) 山本勘助

## 解説

駿府人質時代の竹千代(家康公)の師匠といわれる太原雪齋は、今川家の全盛期を創出した優れた僧侶(禅僧)であり武将、軍師、政治家でもありました。雪齋が住職を務めた臨濟寺と清見寺(ともに静岡市)には「竹千代手習いの間」が残り、少年期の家康公が雪齋の薫陶を受けて育ったことが想像されます。天文18年(1549)、織田信秀の三河進出の拠点 安城城を攻め、城代の織田信広(信秀の長男・庶子)を捕らえて人質交換で竹千代を取り戻す活躍をしたのも今川家最高顧問の雪齋でした。弘治元年(1555)、竹千代が元服した7ヶ月後に60歳で亡くなると、後水尾天皇より「宝珠護国禅師」の称号を賜っています。



雪齋が住職を務めた臨濟寺(静岡市)

## 問題15

弘治3年(1557)、16歳の家康公は瀬名殿(後の築山殿)と結婚しました。瀬名殿の父はだれだったでしょうか？

- (1) 飯尾連龍 (2) 今川義元  
(3) 鵜殿長照 (4) 関口氏純

## 解説

弘治3年(1557)、16歳の家康公は、室町幕府奉公衆であり今川一門の重臣である関口氏純の娘 瀬名殿と結婚しました。2年前、家康公が元服した際、「烏帽子親」(元服の儀式で新成人の後見人を務める者)は当主の今川義元でしたが、「理髪」の役(子供の髪型を大人の髪型に整える役目)を務めたのが、この関口氏純だったのです。氏純の妻は義元の妹といわれ(異説もあります)、人質とはいえ、家康公は義元の姪を正室としたことで、今川の一門衆に準ずる武将として認められました。太原雪斎に師事させたことも併せ、義元は家康公の資質を見込み、将来は嫡男の氏真の右腕としての活躍を期待していたことが想像されます。



家康公が元服の式を執り行った浅間神社  
(静岡市)

## 問題16

永禄元年(1558)、家康公の初陣といわれる「寺部城攻め」では、軍功のあった松平重吉に今川義元から感状が送られています。この松平重吉の家は次のどの松平家でしょうか？

- (1) 大草松平家 (2) 大給松平家  
(3) 奥平松平家 (4) 能見松平家

## 解説

松平重吉宛て今川義元感状は、戦国期の能見松平氏の活躍がわかる重要な史料です。しかし松平重吉自体は、あまり知られた存在とは言えないかもしれません。この問題は、当時の家康公を取り巻く状況をふまえて考えた方が、正解に近づけたと思います。大草松平家は家康公に敵対する勢力で、永禄6年(1563)の三河一向一揆でも一揆方として活動しています。奥平松平家は奥平信昌と亀姫(家康公長女)の子 忠明が、天正16年(1588)に家康公の養子となって成立した家です。大給松平家は松平氏の中でも独自の展開をする有力な家で、「当代記」にも家康公の家臣ではなく自立した存在と記されています。



能見松平家ゆかりの「観音寺」(岡崎市)

## 問題17

近年、前問の「寺部城攻め」の2年前に三河であった「日近合戦」が家康公の初陣ではないかとの説が出されていますが、この戦いの説明として正しいのはどれでしょうか？

- (1) 一族の東条松平忠茂が戦死した。
- (2) 今川から武田に寝返った奥平氏を攻めた。
- (3) 家康公が勝利し、見事、初陣を飾った。
- (4) この戦いをきっかけに、家康公は名前を「元信」から「元康」に変えた。

## 解説

「日近合戦」は、今川方から織田方へ寝返った日近奥平氏を討つため、当時、今川方が日近を攻めた戦いです。家康公の名代として参戦した松平忠茂が戦死するなど、今川方の敗北に終わりました。「寺部城攻め」では家康公の初陣としては遅いなどの理由で、この「日近合戦」が家康公の初陣という説があります。家康公の初陣が敗北では具合が悪いということで、歴史から抹消されたというのは確かに説得力があります。家康公が名前を元信から元康に変えたのは、弘治4年(1558)頃と考えられます。元康の名は尊敬する祖父清康から採ったといわれます。



日近城址(岡崎市)

解答… (1)

## 問題18

永禄3年(1560)、今川軍の尾張侵攻に伴い、先鋒の松平勢を率いる家康公は今川方の最前線の城に兵糧を運び入れる任務を命じられ、成功させました。その最前線の城とはどこでしょうか？

- (1) 大高城
- (2) 刈谷城
- (3) 清須城
- (4) 鳴海城

## 解説

織田氏と今川氏、両家の最前線に位置していた大高城は、当初は織田方の城でしたが、織田信秀の死後、今川氏に属することとなり、一門衆の鵜殿長照が守将として配置されています。人選一つをとっても、対織田氏戦略における重要拠点として位置づけられていたことがわかります。この今川義元の動きに対して、織田信長は丸根・鷺津の両砦を築き対抗しています。

「桶狭間の戦い」の後、大高城は廃城となりますが、桶狭間の戦いに最も深い関係を有する地であり、若き家康公による兵糧入れの地として昔から知られており、尾張藩家老の屋敷地として保護されてきました。昭和13年(1938)に、大高城は国史跡に指定されています。

「尾州桶狭間合戦」歌川豊宣 画  
出典：ウイキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題19

今川軍の桶狭間での敗戦を知った家康公は故郷・岡崎を目指しましたが、増水した矢作川を渡ることができません。そのとき、ある動物が浅瀬の場所を教えたことで家康公一行は無事に川を渡ることができたとのエピソードが残ります。ある動物とは何でしょうか？

- (1) 馬 (2) 鹿 (3) 猫 (4) 龍

## 解説

鹿が家康公を導いて矢作川を渡った話ですが、ここでは松平家の氏神である伊賀八幡宮に伝わる伝承を紹介します。家康公一行が、矢作川を渡る川瀬が見当たらず迷っていたところ、川を渡る一頭の鹿が現れました。この鹿を伊賀八幡宮の使いに違いないと信じた家康公は、その後をたどって川を無事に渡り、大樹寺へ到着したということです。背に乗ったというのはなかなか信じがたいことですが、鹿の渡河はありうることで、実際に起きた出来事なのかもしれません。伊賀八幡宮の鹿の話は本多忠勝の鹿角兜の由緒とつながる話でもあり、伝承が生まれた背景には鹿にまつわる何かしらの出来事が存在したと見るべきでしょう。



伊賀八幡宮 隨身門  
(岡崎市)

解答… (2)

## 問題20

矢作川を渡り菩提寺の大樹寺に入った家康公は、周りを敵兵に囲まれ、先祖の墓前で自害を覚悟しますが、登壇上人に諫められ、生きて天下泰平の世を築くことを志します。このとき、上人から授かった言葉は何でしょうか？

- (1) 厭離穢土 欣求浄土  
(2) 堪忍は無事長久のもと、怒りは敵と思え  
(3) 天下は天下の天下なり  
(4) 鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス

## 解説

「厭離穢土」「欣求浄土」は、極楽浄土に往生するために必要なことを示した「往生要集」に由来する文言です。天台宗の僧侶である源信がまとめました。十門からなる「往生要集」の第一門と第二門に説かれており、「厭離穢土」は、現実の世界の中は、穢れた世界であるからこの世界を厭い離れ、「欣求浄土」は次生において清浄な仏の国土に生まれることを願い求めることを意味します。家康公は、汚れた戦国の世を穢土ととらえ、浄土である平和な世を創ることを誓いました。この言葉を旗印に定めたときが、家康公による“泰平の世”創出の始まりと言えるでしょう。



大樹寺 本堂(岡崎市)

解答… (1)

## 問題21

岡崎城に入り、西三河の平定を進める家康公は、永禄5年(1562)、今川方の三河上ノ郷城を攻め、城主の子ども二人を捕え、人質交換で駿府に残した妻子を取り戻しました。今川氏真の従弟ともいわれる上ノ郷城主はだれだったのでしょうか？

- (1) 朝比奈泰朝 (2) 飯尾連龍  
(3) 鵜殿長照 (4) 岡部元信

## 解説

上ノ郷城(愛知県蒲郡市)は戦国時代に鵜殿氏が本拠とした城です。城主の鵜殿長照は、母親が今川義元の妹で義元の甥、氏真の従弟にあたります。「桶狭間の戦い」の際、家康公が「大高城兵糧入れ」を成功させ入城するまで、大高城を守っていたのがこの長照でした。桶狭間での今川義元討死後、それまで今川方に仕えていた家康公は独立を図り、三河国内の今川方と争うようになります。長照の居城 上ノ郷城に攻め入った家康公は長照を討ち取ると、長照の二子 氏長・氏次を捕らえ、人質交換で駿府に残されていた妻子を岡崎に迎え入れることに成功しました。後に氏長は家康公の旗本に、氏次は深溝松平家忠に仕えています。



上ノ郷城址(愛知県蒲郡市)

解答… (3)

## 問題22

織田信長と同盟を結び、西三河を平定した家康公を三河一向一揆が襲います。親鸞聖人が開き、八世蓮如により三河に広まった宗派で、一向宗と呼ばれたのは、現在の何宗のことでしょうか？

- (1) 浄土真宗 (2) 真言宗  
(3) 天台宗 (4) 日蓮宗

## 解説

法然房源空により開宗された浄土宗は、その弟子たちによって九つに別れながらも浄土教団として発展していきます。そのなかでも浄土宗西山義、浄土宗鎮西義、そして親鸞による浄土真宗が布教の中心的役割を果たしてきました。15世紀中頃、これら浄土教団による積極的な三河布教により寺院数が増加しました。鎮西義や西山義は松平氏と結びつきながら寺院数を増加させていき、浄土真宗は蓮如の三河布教により、地域豪族が帰依し、また多くの天台宗寺院を浄土真宗に改宗させながら、寺院数を増やしていきました。このとき蓮如に帰依し、寺院増加の一翼を担った地域豪族が、後に松平氏に服属し譜代家臣となるのです。

本願寺中興の祖／蓮如上人御影(肖像)  
出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題23

家臣同士が二つに分かれて戦うことになった三河一向一揆。次のなかで、家康公の味方となつて一揆方と戦つた家臣はだれでしょうか？

- (1) 石川数正  
(2) 夏目吉信(広次)  
(3) 本多正信  
(4) 渡辺守綱

## 解説

三河一向一揆は、主君への忠義か、仏への信仰かの選択で譜代家臣団が二分して争うことになった大事件です。家康公生誕の際に「墓目の役」を務めた重臣の石川清兼は一向一揆の中心寺院の一つ、野寺 本證寺(安城市)の信徒総代であり、石川一族は一向宗徒と深い関係にありました。しかし、清兼の嫡孫の数正や三男の家成は家康公と同じ浄土宗に改宗し、家康公とともに一揆勢と戦つたのです。一揆終息後、数正は飛躍していく家康公の重臣として戦はもちろん外交交渉でも活躍。駿府に残した家康公の妻子の奪還(人質交換)交渉で手腕を発揮しています。この忠義に厚い数正がどうして後に出奔したのか。その理由に思いを巡らすことも歴史の醍醐味です。



石川数正 肖像 / 「長篠合戦図屏風」(成瀬家本)より抜粋  
出典：ウィキメディア・コモンズ

## 問題24

一揆に便乗し、門徒ではないのに家康公に反抗した国衆や家臣もいました。このようななかで、家康公の味方として戦つた国衆はだれでしょうか？

- (1) 大草松平昌久  
(2) 吉良義昭  
(3) 酒井忠尚  
(4) 水野信元

## 解説

足利一門衆である吉良氏は、源氏の血筋とはいえ、新興勢力である松平氏が三河の盟主となることに対し不満をつのらせます。また、松平氏は、安城松平家に優秀な当主が続いたことで他家を制して惣領家となつていましたが、すべての松平家は同列・同格であり、誰もが惣領家となる資格を有していました。そのような中で、吉良義昭を中心に大草松平昌久や酒井忠尚等は家康公に対して反抗の意を表します。このような周囲に敵だらけの状況下において、伯父であり、知多半島を支配下としていた有力国衆である水野信元は家康公の味方となり三河統一を支援しました。武力のみならず資金面でも家康公の大きな支えとなつたことでしょう。



水野家の菩提寺 楞嚴寺(愛知県刈谷市)

## 問題25

三河一向一揆を終息させた家康公は東三河に展開します。家康公が東三河統一を果たす過程の説明として、正しいのはどれでしょうか？

- (1) 最前線の東三河の統治を、信頼できる自分の兄弟に任せた。
- (2) 三河統一の証として、朝廷より左京大夫に任官された。
- (3) 吉田城を攻め、大原資良(小原鎮実)を討ち取った。
- (4) 有力国衆に対し、引き続き領地を治めることを認めた。

## 解説

東三河に展開する際の家康公の統治の特徴として、東三河の国衆たちの所領統治を引き続き認めたことが挙げられます。これにより、迅速かつスムーズに東三河に勢力を拡大できました。さらに吉田を中心とした東三河を酒井忠次に、田原を本多広孝に任せています。酒井忠次は人びとに「城主」と認識されるなど、実質的な統治を行う存在だったと考えられます。吉田城の大原資良が退去し、牛久保の牧野氏を従属させた家康公は、三河一国をほぼ手中に収めました。その後、家康公は三河守に任じられ、松平から徳川に改姓します。ここに戦国大名徳川氏が誕生しました。



吉田城(愛知県豊橋市)

解答… (4)

## 問題26

三河統一直後の「三備の制」の説明として、正しいのはどれでしょうか？

- (1) 西三河の旗頭に石川数正が就任した。
- (2) 本多忠勝や榊原康政などの譜代家臣は家康公直属の旗本とされた。
- (3) 「三備」とは「東三河衆」「西三河衆」「奉行衆」のことである。
- (4) 松平一門衆は「三備の制」とは関係なく、自由な活動が許された。

## 解説

三河を統一し、遠江へ勢力を拡大するにあたり、家康公を頂点とする指揮系統をはっきりさせ、家康公からの命令を末端まで伝えて、各自が理解して行動する制度が必要でした。そのために成立させたのが「三備の制」でした。西三河は石川家成、東三河には酒井忠次といった筆頭家臣を旗頭とし、その下には扱いに配慮が必要な国衆や一門衆を配置しています。また子飼いの譜代衆は、武力に長けた譜代家臣を旗本衆として、能吏に長けた譜代家臣を奉行衆として、適材適所の配置を行い、強力な家臣団を創設しています。



西三河の旗頭 石川家成の子孫が藩主を務めた伊勢亀山藩の亀山城 多門櫓(三重県亀山市)

解答… (2)

## 問題27

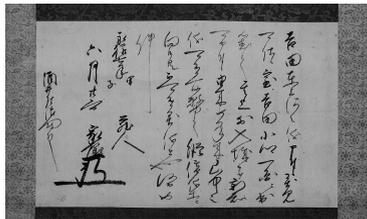
家康公は三河を統一すると、重臣の酒井忠次を東三河の旗頭として同地域の統治を委ねます。そして忠次をある城の城代に任命しましたが、その城とはどこでしょうか？

- (1) 田原城 (2) 長篠城  
(3) 西尾城 (4) 吉田城

## 解説

三河一向一揆を鎮めた家康公は、三河国の統一を目指しました。東三河は今川氏勢力下の遠江国と境を接する地域で、その中心拠点となるのが吉田城でした。東海道が通る吉田(もとは今橋と言いました)は陸上の要衝であり、海にも面しているため舟で人や物資を運ぶことのできる水上の要衝でもありました。

家康公は酒井忠次に命じて吉田城を攻略、永禄8年(1565)には忠次を城代に任じます。忠次は東三河の松平一族や国衆を統率する権限を与えられ、東三河を統治する「旗頭」となりました。西三河の石川家成(のちに甥の石川数正)と共に重臣筆頭として徳川氏の領国経営を支えました。



酒井忠次に東三河統治を任せる旨を記した家康公判物(致道博物館 蔵/山形県鶴岡市)

## 問題28

永禄9年(1566)、三河を統一した家康公は朝廷より官位を与えられ、松平から徳川への改姓が認められました。家康公が与えられた官位はどれでしょうか？

- (1) 従一位・右大臣  
(2) 正二位・内大臣  
(3) 従四位下・右近衛権少将  
(4) 従五位下・三河守

## 解説

三河を統一した家康公は、三河の盟主として従五位下の叙位と三河守の任官を望みましたが、朝廷からは「前例がない」と却下されました。そこで家康公は、同じ岡崎出身の浄土宗西山深草派本山 誓願寺住職の泰翁をとおし、関白 近衛前久や公卿 吉田兼右等の協力を求めました。そして彼らは万里小路家の古記録から、新田源氏の一族 得川氏の一流が藤原氏を称したという前例を見つけ出し、松平氏が得川氏(世良田氏)の流れを汲む家であることなどが認められ、永禄9年(1566)、家康公は徳川への改姓(複姓)と従五位下・三河守の叙位任官が適ったのです。家康公25歳、徳川家康の誕生です。



徳川家康公騎馬像/徳川を名乗った25歳の家康公をイメージしています。(岡崎市)

## 問題29

永禄11年(1568)、遠江侵攻を開始した家康公は、翌年1月、今川氏真が籠城する掛川城を攻めます。長期戦の末、今川氏真と和睦交渉をした家康公は、かつての主家である今川氏真をどうしたでしょうか？

- (1) 和睦はまともらず戦いが再開し、氏真を討ち取った。
- (2) 今川家臣の助命を条件に切腹させた。
- (3) 正室(妻)の実家である北条氏康の許に送り届けた。
- (4) 人質を取り、徳川家の家臣に取り立てた。

## 解説

家康公より4歳年上の今川氏真については、歴史の表舞台に立っている時期が短く、あまり知られていません。家康公は氏真が籠る掛川城を開城させると、氏真と妻の早川殿を早川殿の実家がある北条氏の領地近くの伊豆戸倉城まで松平一門衆に護送させました。氏真の後半生は不明な点が多いものの、最終的には家康公の庇護を受け、慶長19年(1614)、江戸にて77年の波乱の生涯を全うしました。子孫は高家として代々の将軍に仕え、今川家の家名は明治に至るまで存続したのです。



掛川城(静岡県掛川市)

## 問題30

永禄11年(1568)、足利義昭を奉じて織田信長が上洛の軍勢を起こした時に、家康公の名代として出陣した家臣はだれでしょうか？

- (1) 石川家成
- (2) 酒井正親
- (3) 鳥居忠吉
- (4) 藤井松平信一

## 解説

松平信一は、三河国碧海郡藤井(愛知県安城市)を拠点とする藤井松平家の二代目で、松平5代長忠の孫、7代清康の従弟にあたります。家康公より3歳年長で、「姉川」や「長篠」、「小牧・長久手」など多くの戦いで数々の軍功を立てた武将です。永禄11年(1568)、織田信長の上洛軍に家康公の名代として出陣する際には、家康公から饒として具足が贈られました。この上洛戦の六角義賢との「箕作城の戦い」では、織田の諸将とともに奮戦し、本丸一番乗りを果たしました。信長は信一の活躍を賞して、着ていた革の胴服を脱いで与えたといわれます。関ヶ原戦後は常陸土浦藩の初代藩主となり、3万5千石を与えられています。



藤井城址(愛知県安城市)

## 問題31

元亀元年(1570)の越前朝倉攻めの退却戦「金ヶ崎の退き口」で、渡辺守綱とともに徳川軍の殿軍を務めたといわれる家臣はだれでしょうか？

- (1) 青山忠門 (2) 植村家存  
(3) 内藤正成 (4) 米津常春

## 解説

内藤正成は、抜きんでた弓の名手として知られる武将です。はじめは伯父の内藤清長に仕えていましたが、天文11年(1542)、織田信長の父 信秀の軍が三河上野城(愛知県豊田市)に攻め寄せた際の戦いや、翌年の「小豆坂の戦い」における凄まじい弓働きを見た家康公の父 松平広忠が、自分の直臣として取り立てたといいます。三河一向一揆では、一族が二分するなか家康公に従い、東三河平定戦では盾に隠れて待ち伏せする敵兵を、弓矢で盾ごと射抜いたというエピソードが伝わっています。その強弓ぶりは「軍神」と讃えられ、徳川十六神将のひとつりに数えられています。子孫は大身旗本として幕府に仕えました。



内藤正成の肖像「徳川二十将図」より  
(日光東照宮 蔵／栃木県日光市)

出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (3)

## 問題32

元亀元年(1570)6月、近江国において織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍が戦った合戦はどれでしょうか？

- (1) 姉川の戦い (2) 一乗谷の戦い  
(3) 志賀の陣 (4) 賤ヶ岳の戦い

## 解説

元亀元年(1570年4月に永禄から改元)6月、織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍が相対した合戦は、姉川を挟んで戦ったことから「姉川の戦い」と呼ばれます。その2ヶ月前、将軍 足利義昭を奉じた織田信長からの上洛要請を拒否した越前(福井県)の朝倉義景を、信長を中心とした家康公はじめ幕府軍が攻めました(越前朝倉攻め)が、信長の義弟である浅井長政(妹 お市の夫)が裏切ったことにより越前金ヶ崎より京都へ退却を余儀なくされる事態が起こっていました。信長は裏切った浅井長政討伐の軍を起こし、再度の出兵要請を受けた家康公も出陣。本多忠勝や榊原康政らの活躍もあり、織田・徳川連合軍が勝利したのです。



姉川古戦場跡の石碑(滋賀県長浜市)

解答… (1)

## 問題33

元亀元年(1570)、三河から遠江への進出に伴い、家康公が新たな居城とする予定で遠江国の国府があった地に普請(建設)を進めていたのはどの城でしょうか？

- (1) 掛川城 (2) 諏訪原城  
(3) 二俣城 (4) 見付城

## 解説

「姉川の戦い」出陣直前の元亀元年(1570)6月、家康公は岡崎城から新たな居城、引間(引馬)城に移りました。この際、“ひくま”という地名が“馬を引く”(戦に負ける)につながり縁起がわるいことから、かつてこの地にあった荘園「浜松荘」に因み、浜松と改称したと伝わります。当初、家康公は遠江国の国府や守護所が置かれ、古くから政治の中心地であった見付(静岡県磐田市)に居城を移そうと見付城(城之崎城)の普請を進めていたのですが、織田信長からの反対意見もあり、天竜川の西で尾張・三河に近く、交通と商業の要所である引間に移ることにしたのです。



見付城址(静岡県磐田市)

解答… (4)

## 問題34

元亀3年(1572)、武田信玄との「三方ヶ原の戦い」の前哨戦となった「一言坂の戦い」において、撤退する徳川軍の最後尾に立ち、獅子奮迅の活躍で敵の武田方からも讃えられた家臣はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

## 解説

武田信玄の徳川領遠江侵攻に対し、内藤信成や本多忠勝、大久保忠佐を偵察隊として先行させ、自身も出陣した家康公でしたが、武田の大軍に遭遇し、退却を決めます。信成とともに殿を任された忠勝は、退いたり、押したり、火を放ったりと武田の追撃隊を翻弄し、無事、徳川全軍を浜松城に退却させることに成功しました。この「一言坂の戦い」で、敵将の小杉左近は忠勝の活躍を称賛し、「家康に過ぎたるものが二つあり 唐の頭に本多平八」と謳って立札を立てたと伝わります。“唐の頭”とはヤク(中国の高地に生息するウシ科の動物)の尻尾の毛で装飾された兜のことで、家康公も愛用していたので、家康公も愛用していたのでしょう。

一言坂古戦場跡の碑  
(静岡県磐田市)

出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題35

三河一向一揆では一揆方につき、戦後に家康公から赦されて三河・遠江の郡代を務め、「三方ヶ原の戦い」において家康公を逃がすため身代わりとなって討死した家臣はだれでしょうか？

- (1) 鳥居忠広 (2) 夏目吉信(広次)  
 (3) 成瀬正義 (4) 本多忠真

## 解説

「三方ヶ原の戦い」では、浜松城の留守居をしていた夏目吉信でしたが、味方の形勢不利を見ると家康公の救援に駆けつけ、家康公を逃がすと自らを家康と名乗り、身代わりとなって討死しました。吉信は9年前の三河一向一揆で一揆側に付き、赦免された後、事務管理能力を買われて三河・遠江の郡代(郡の代官)に取り立てられていました。吉信は、その恩に報いるのはこのときだと思ったのでしょう。三方ヶ原では、鳥居忠広(鳥居元忠の弟)や成瀬正義(成瀬正成の叔父)、本多忠真(本多忠勝

の叔父)も戦死しています。家康公は三方ヶ原の戦死者を弔うため法蔵寺(岡崎市)に供養塔を建立しました。



夏目吉信 旌忠碑(静岡県浜松市)

## 問題36

「三方ヶ原の戦い」で大敗を喫した家康公。大久保忠世らが夜襲を仕掛け、武田軍に一矢を報いたとされる戦場はどこでしょうか？

- (1) 刑部城 (2) 犀ヶ崖  
 (3) 佐鳴湖 (4) 祝田坂

## 解説

三方ヶ原の戦いで大敗したその夜に、なんとか武田軍に一矢を報おうと大久保忠世、天野康景らが一計を案じて夜襲を仕掛け、崖に架けた布の橋に混乱した武田兵を追い込み、多くの武田兵を崖下に追い落とした局地戦が「犀ヶ崖の戦い」です。この一戦で武田信玄は、「勝ちても怖き相手」と家康公を讃えたといます。この戦いで亡くなった将兵たちを供養するため、家康公が始めたと伝わる「遠州大念仏」は今も毎年7月15日に行われています。

現在、この地に建つ犀ヶ崖資料館には、三方ヶ原で殿を務めて戦死した本多忠真の碑が建ち、「表忠彰義之碑」の文字は徳川16代家達公が揮毫しています。



本多忠真 顕彰碑(静岡県浜松市)

## 問題37

天正<sup>てんしやう</sup>3年(1575)、信玄の跡<sup>あと</sup>を継<sup>つ</sup>いだ武田勝頼<sup>かつより</sup>の軍が奥三河に侵攻すると、これに呼応<sup>こおう</sup>し、武田軍を岡崎城へ引き入れようとした岡崎の町奉行はだれでしょうか？

- (1) 天野康景<sup>あまの やすかけ</sup> (2) 大岡弥四郎<sup>おおおか や しろう</sup>  
 (3) 高力清長<sup>こうりききよなが</sup> (4) 本多重次<sup>しげつぐ</sup>

## 解説

民政や算術に長け、岡崎の町奉行に拔擢<sup>ぼつてき</sup>されていた大岡弥四郎でしたが、武田勝頼と内通し、家康公への謀反を画策<sup>かくさく</sup>していました。武田勝頼が奥三河に侵攻し、先発隊が足助城を降伏させると、弥四郎や同じく町奉行の松平新右衛門らはこれに呼応して、武田の先発隊を足助から岡崎城へ引き入れようとしたのです。しかし、信康家臣の山田八蔵重英<sup>やまのたけひで</sup>が裏切り、通報したことで未然に発覚し、弥四郎一味は捕らえられ処断<sup>しゅたん</sup>されました。弥四郎は郊外で土に埋められ、その首を通行人に竹鋸で引かれたといいます。事件の発覚により、武田の先発隊は岡崎城をあきらめ、勝頼が率いる本隊と合流して東三河へ向かいました。



足助城址(愛知県豊田市)

## 問題38

天正3年(1575)の「長篠・設楽原の戦い」において、武田軍に包囲<sup>ほうい</sup>された長篠城から脱出して、岡崎城の家康公の許まで援軍要請に走り、帰城途中に武田軍に捕まって磔<sup>はりつけ</sup>にされた奥平家の家臣はだれでしょうか？

- (1) 鈴木金七郎<sup>すずき きんしちろう</sup> (2) 鳥居強右衛門<sup>とりい すね えもん</sup>  
 (3) 匂坂牛之助<sup>さきざか うしの すけ</sup> (4) 恩田半五左衛門<sup>おんだはんご ざ えもん</sup>

## 解説

武田の大軍に包囲され、猛攻に耐えて籠城戦を続けた城将の奥平信昌でしたが、兵糧蔵を失ったところで、家臣の鳥居強右衛門と鈴木金七郎を長篠城から脱出させて、岡崎城の家康公の許まで援軍要請に向かわせました。二人は無事に岡崎城に着き、家康公に謁見。強右衛門は長篠城に援軍の報せを早く届けようと帰城を急ぎ、長篠城を目前にしたところで武田軍に捕まっていました。投降を勧める武田側を利用して、大音声で味方の城兵に「援軍来る」を伝えると処刑されました。金七郎は狼煙で「援軍来る」を報せましたが、戦後、武士を捨て帰農しています。



鳥居強右衛門を描いた錦絵の武者絵

出典：ウイキメディア・コモンズ

## 問題39

前問の長篠・設楽原の戦いにおいて、武田方の拠点の一つである鷲ヶ巣山砦を夜襲して武田軍の背後を取る作戦を織田信長に提案し、見事に成し遂げた家臣はだれでしょうか？

- (1) 石川数正 (2) 大久保忠世  
(3) 酒井忠次 (4) 松井忠次

## 解説

江戸中期に発刊された逸話集『常山紀談』では次のように記述されています。長篠の戦いにおける鷲ヶ巣山砦奇襲の作戦は、信長の本營で行われた軍議で忠次が発案したものであったが、信長からは「そのような小細工は用いるにあらず」と頭ごなしに罵倒され、問答無用で却下された。しかし、軍議が終わって諸将が退出した後、信長は忠次を密かに呼び出し、「先ほどは作戦の情報が敵に漏れる恐れがあったゆえ、わざとお前の発案を却下したが、お前の発案は理にかなった最善の作戦だ。指揮はお前に任せるから、直ちに実行せよ」と命じた。戦後、信長は忠次を「後ろにも目があるかのような活躍ぶり」と称賛し、陣羽織を与えたとのことです。



鷲ヶ巣山砦の攻防戦／長篠合戦図屏風より

## 問題40

天正4年(1576)3月、家康公から駿河との国境に近い遠江の牧野城(諏訪原城)の城主に取り立てられた武将はだれでしょうか？

- (1) 今川氏真 (2) 鶴殿氏長  
(3) 吉良義定 (4) 堀越定次

## 解説

永禄12年(1569)、家康公と和睦し掛川城(静岡県掛川市)を退去した今川氏真は正室の実家である北条氏の許に移りましたが、元亀2年(1571)に北条氏政が武田勝頼と再び同盟を結ぶと、小田原(神奈川県)から離れて浜松の家康公を頼りました。「長篠・設楽原の戦い」では後詰めとして牛久保城(愛知県豊川市)に在城しています。氏真は、天正3年(1575)、武田に侵攻された遠江国東部の失地回復戦のひとつである諏訪原城(静岡県島田市)攻めにも参戦しており、奪還後の翌年3月から1年間、家康公はこの牧野城(諏訪原城)から改称の城主に氏真を任命しています。



牧野城(諏訪原城)址(静岡県島田市)

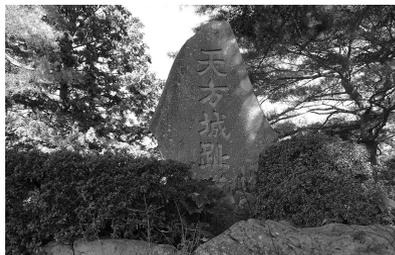
## 問題41

天正7年(1579)、家康公の嫡男<sup>ちやくなん</sup> 信康が二侯城<sup>ふたまた</sup>で切腹<sup>せつぷく</sup>したとき、介錯<sup>かいしやく</sup>をした家臣はだれだったでしょうか？

- (1) 天方通綱<sup>あまがたみちつな</sup>  
 (2) 大久保忠世<sup>おほくほちゅうせい</sup>  
 (3) 服部正成<sup>はっとりまさなり</sup>  
 (4) 平岩親吉<sup>ひらいわちかよし</sup>

## 解説

天方氏は遠江国天方城(静岡県森町)を本拠にする国衆で、通興の時に遠江に進出した家康公に従い、天正7年(1579)には二侯城主の大久保忠世に付けられていました。通綱は通興の子で、信康が二侯城で切腹する際に検視役を命じられていましたが、介錯役の服部正成が信康の首を刎ねることができず、やむを得ず代わりに通綱が介錯をしました。通綱は主君の嫡男の首を刎ねたという自責の念に駆り立てられ、高野山(和歌山県)にて仏門に入りましたが、後に家康公の二男 結城秀康に召し出され仕えました。一方、父の通興は天方家の存続を図るため、外孫で青山忠成の五男通直を養子に迎えています。



天方城址(静岡県周智郡森町)

## 問題42

天正10年(1582)の武田攻め(甲州征伐)からの帰路で、織田信長の本陣に招かれ、信長から「花も実も兼ね備えた勇士である」と賞されたと伝わる家康公の家臣はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政  
 (2) 酒井忠次  
 (3) 榊原康政  
 (4) 本多忠勝

## 解説

甲州征伐からの帰りに家康公の領国(駿河、遠江、三河)を通過して安土へ帰る信長一行を、家康公は諸所で手厚く接待しました。「寛政重修諸家譜」(寛政年間<1789年-1801年>に江戸幕府が編修した大名や旗本の家譜集)では、この途次に信長が天竜川の渡河地点に用意された本陣に忠勝を招き、織田の家臣たちに「この者は本多平八郎という花も実もある勇士である」と紹介したとあります。また、この忠勝のことを、後に豊臣秀吉は「日本第一、古今独歩の勇士」と称し、西の立花宗茂を引き合いに「東には本多忠勝という天下無双の大将がいる」と称賛しています。



本多忠勝 像(岡崎公園/岡崎市)

## 問題43

天正10年(1582)6月に起きた「本能寺の変」の凶報を、そのとき和泉国堺に滞在していた家康公に報せるため、京都から駆けつけた徳川家の御用商人はだれでしょうか？

- |                                  |                                     |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| (1) 今井宗久<br>いまい そうきゆう<br>ちや きよのぶ | (2) 角倉了以<br>すみのくらしやう い<br>つ だ そうきゆう |
| (3) 茶屋清延<br>ちや や きよのぶ            | (4) 津田宗及<br>つ だ そうきゆう               |

## 解説

茶屋家は京都の商人で、茶屋清延の父中島明延が信濃守護 小笠原氏の家臣を辞去し、京で呉服商を開いたのが始まりといます。清延は若い頃(永禄年間の頃)より浜松で家康公に仕え、武士として、また徳川家の御用商人として務め、都の情報収集にも活躍したと伝わります。「本能寺の変」後の堺から伊勢白子浜への「伊賀越え」は、道は険しく、家康公の首を狙う土豪や野武士たちが多く潜んでいました。清延は土豪や伊賀者たちとも繋がりがあり、野武士や野盗などには金銭も使って安全を確保しながら、家康公一行の先導を果たしたのです。後に茶屋家は「京の三長者」と言われるまでに成長しています。



家康公一行が越えたと徳川実紀が伝える「御斎峠」からの眺望(滋賀県甲賀市・三重県伊賀市)

解答… (3)

## 問題44

「本能寺の変」を受け、堺から岡崎へ戻る「伊賀越え」の危機において活躍し、後に伊賀忍者の棟梁のようにいわれることとなった、先祖が伊賀国出身の家臣はだれでしょうか？

- |                                   |                     |
|-----------------------------------|---------------------|
| (1) 多羅尾光俊<br>た ら おみつとし<br>ぼん すけさだ | (2) 服部正成<br>もも ちたんば |
| (3) 伴 資定<br>た ね すけさだ              | (4) 百地丹波<br>もも ちたんば |

## 解説

服部家は代々、伊賀国で忍者の棟梁を務めた三家のひとつで、その一派の保長が京に出て12代将軍 足利義晴に仕えたといえます。しかし衰退した将軍家に見切りをつけた保長は、三河で勢力を増す松平7代 清康(家康公の祖父)に将来性を感じたのか、再仕官します。子の正成は家康公と同じ年に岡崎で誕生し、長じて槍の達人として「鬼半蔵」と称される活躍をし、十六神将にも数えられますが、一般的には伊賀忍者の棟梁 服部半蔵(伊賀の半蔵)の名で広く海外にも知られています。「伊賀越え」の際には、家康公に随行していた茶屋清延とともに伊賀や甲賀の土豪と交渉し、家康公一行の警護と案内を務めたと伝わります。



服部正成の肖像

出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (2)

## 問題45

「本能寺の変」後、旧武田領の甲斐・信濃・上野の3ヶ国の帰属を巡り、徳川・北条・上杉軍が衝突した「天正壬午の乱」において、甲斐国に侵入した北条の大軍を、鳥居元忠、水野勝成らが迎え撃って勝利した戦いを何というのでしょうか？

- (1) 上田合戦 (2) 川中島の戦い  
(3) 黒駒合戦 (4) 天目山の戦い

## 解説

天正壬午の乱では、天正10年(1582)7月に家康公は甲斐に進軍。保護していた武田遺臣らを登用して甲斐掌握を進めていましたが、8月に北条氏忠の大軍が御坂峠(富士吉田と甲府盆地を繋ぐ峠)を越えて黒駒(山梨県笛吹市)へ攻め入り、甲府(山梨県甲府市)を守っていた鳥居元忠らがこれを迎え撃って撃破しました。これを「黒駒合戦」といいます。一方、家康公は若神子で北条氏直と対陣が続いていましたが、10月末に和議が成り、北条軍は撤退しました。これにより甲斐・信濃2ヶ国は徳川領となり、鳥居元忠には北条氏が占領していた郡内領(山梨県都留市周辺)が与えられています。



鳥居元忠 肖像  
(常楽寺 蔵 / 栃木県壬生町)  
出典：ウィキメディア・コモンズ

## 問題46

前問の「天正壬午の乱」の結果について、正しい記述はどれでしょうか？

- (1) 家康公は織田政権(羽柴秀吉)の了承を得て出陣し、2ヶ国を得た。  
(2) 北条氏直は大軍を率いて出陣したが、新領地を得ることはできなかった。  
(3) 越後の上杉景勝は越前から柴田勝家の侵攻を受け、信濃から撤退した。  
(4) 上野国は旧武田家臣の武将 真田昌幸の領国となった。

## 解説

家康公は、信長の急死により混乱を極める旧武田領への出兵の承認を織田家中に求め、織田家の跡目と知行を決定した天正10年(1582)6月27日に行われた「清須会議」の結果を待ち、7月7日付けで、織田家重臣の羽柴秀吉から軍事動員の了承を取り付ける書状を受け取っています。清須会議によって秀吉の地位はさらに高まりましたが、この時点では秀吉はあくまで織田家重臣の立場であり、書状では書止文言が「恐惶謹言」だったり、「家康様参人々御中」など文書様式の上で、秀吉から家康公への敬意が表されています。



「天正壬午の乱」で大きな功績を残した武田遺臣 依田信蕃の墓所 蕃松院(長野県佐久市)

## 問題47

「本能寺の変」後、織田家の後継者として振る舞い、勢力を拡大する秀吉に対し、危機感を持った織田家の親族が家康公に助けを求めます。家康公が助け、ともに「小牧・長久手」で秀吉と戦った織田家の親族とはだれでしょうか？

- (1) 信長の嫡孫(長男・信忠の長男)・三法師
- (2) 信長の二男・織田信雄
- (3) 信長の三男・織田信孝
- (4) 信長の弟・織田有楽斎信益

## 解説

信長の死後、織田家の後継者を巡っては、三男の信孝を推す柴田勝家と、信忠の嫡子である三法師を推す羽柴秀吉との間での争いが生じ、信雄は蚊帳の外でした。ところが、柴田勝家によって滅ぼされると、今度は信雄が信孝を攻め自害に追い込みます。信雄は三法師を後見する立場になり清須城から安土城に入りますが、秀吉は信雄に安土城からの退去を要求、改めて対立が生じました。このような状況の中で、信雄は家康公に協力を要請、家康公は信長以来の同盟関係を見捨てないとしてその要請を受けることとしました。この結果、秀吉との直接対決は避けられないものとなり、「小牧・長久手の合戦」が起きたのです。



織田信雄 肖像  
(総見寺 蔵/名古屋市中区)  
出典：ウイキメディア・コモンズ

## 問題48

天正12年(1584)、「小牧・長久手の戦い」の前哨戦で、秀吉方の羽黒砦を攻略し、戦況を有利に導いた徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政
- (2) 酒井忠次
- (3) 榊原康政
- (4) 本多忠勝

## 解説

織田信雄の清須城を攻めようと考えた秀吉は、美濃国を経て犬山城に入ります。この段階で濃尾平野一帯が戦場になると考えた双方は、その昔、信長が居城として美濃進出の足掛かりとした小牧山城跡に目を付けました。ここに陣を構えれば非常に強固な砦としての機能を果たすことになるからです。秀吉方の森長可は、小牧山付近の羽黒に砦を構え足場を固めていましたが、酒井忠次はこの砦を攻めて小牧山奪取を有利にしようと考えたのでした。「家忠日記」によれば、酒井隊は敵兵300を討ち捕えたとあります。この後、計画通り小牧山を奪取した徳川軍は新たな堀の掘削や整備を行い、大軍の秀吉軍と互角の戦いを進めることができました。



羽黒砦土塁 跡(愛知県小牧市)

## 問題49

「小牧・長久手の戦い」で秀吉に対し“大逆無道”の人物と高札に檄文を掲げたと伝わる徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

## 解説

徳川・織田の連合軍と羽柴秀吉軍の双方がにらみ合いの状態に陥っているとき、先にしびれを切らせようと考えたのでしょうか、榊原康政の手によって秀吉を非難する檄文が書かれました。その内容は、江戸期の幾つかの史料に登場しますが、「藩幹譜」には「それ羽柴秀吉は野人の子、もともと馬前の走卒に過ぎず」で始まる一節から、信長の恩を忘れて勝手に君位を奪うばかりか、子の信孝と母娘を虐殺し、今度は信雄に兵を向ける悪逆非道を非難しています。そして家康公は信長との信義を重んじ、信雄を助けるのだと結んでいます。これは、徳川の正当性を訴える性格のものであり、大義を前面に出した戦であることを強調しているのでしょう。



高札を掲げる榊原康政 像  
(岡崎市)

解答… (3)

## 問題50

「小牧・長久手の戦い」において、武田の旧臣を中心とした部隊を指揮し、赤で統一した甲冑・具足で大活躍した徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

## 解説

武田氏が滅んだ3ヶ月後、「本能寺の変」によって織田家の支配が崩れると、家康公は甲斐国と信濃国の平定に乗り出しました。特に武田の遺臣に対する扱いは慎重を極め、一揆が起きることのないよう、味方に引き入れる形をとりながら鎮撫に努めたのです。その中でも優秀な遺臣たちは徳川の家臣として再出仕を促されました。特に山県昌景の家臣たちは酒井忠次の助言で井伊直政に付属させたと記されます(徳川実記)が、これらの武士たちの中に、武田騎馬隊の主力として活躍した上野国甘楽郡の「小幡衆」が含まれていました。彼らは、赤色の具足に揃えていたことから、直政も配下の武士たちの具足を赤に揃えたと伝えられています。



小幡氏赤備具足  
(甘楽町歴史民族資料館/群馬県甘楽郡)

解答… (1)

## 問題51

「小牧・長久手の戦い」において、<sup>おい</sup>甥の<sup>はしほひでつくたい</sup>羽柴秀次隊の敗戦を聞き、長久手へ急行する秀吉の数万の軍勢をわずか<sup>ほ</sup>500の兵で足止めし、秀吉に「東国一の勇士」と褒<sup>たた</sup>め称えられたと伝わる徳川四天王の一人はだれでしょうか？

- (1) 井伊直政                      (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政                      (4) 本多忠勝

## 解説

小牧山から長久手方面に出陣した主な武将は、榊原康政、井伊直政、大須賀康高、高木清秀、内藤正成、安藤直次、水野勝成などでした。その中で本多忠勝は石川数正や酒井忠次らとともに小牧山の留守を任されたのですが、それが不満であったと伝えられています。家康公が出陣した後、<sup>がくでん</sup>楽田砦にいた秀吉が数万の大軍で追撃に出た報告を受け、自ら数百の兵のみで追撃の阻止に向かいました。龍泉寺川沿いに秀吉軍を威嚇した忠勝は、秀吉の目の前で馬を降り、馬に水を飲ませるなど<sup>ごうたん</sup>豪胆な振る舞いをしたと伝えられています。



本多忠勝 像  
(九華公園／三重県桑名市)

## 問題52

天正13年(1585)、岡崎城代を務める重臣が秀吉の許<sup>しゅっぼん</sup>に出奔する事件が起こりました。この重臣とはだれでしょうか？

- (1) 石川数正                      (2) 酒井忠次  
(3) 本多重次                      (4) 松平康忠

## 解説

石川数正の出奔については、その理由を示す明確な史料が残されていないため、謎の多い出来事となっています。小牧陣の後に兵を引き、いったんは秀吉と和睦をした家康公でしたが、その際の交渉に当たったのが数正でした。和睦の条件として秀吉に人質を差し出すことなどを持ち帰り、家臣たちの反感を買ったとも考えられています。ただ、天正12年(1584)の和睦から翌天正13年(1585)11月の出奔までに、秀吉の官位が関白まで上り詰めており、家康公が戦いを挑むことの無謀さ、限界を悟った数正が、自らが徳川家を出ることで何らかのブレーキをかけたのではないかと考えられています。



石川数正が築いた松本城(長野県松本市)

## 問題53

天正14年(1586)4月、家康公を<sup>しんじゅう</sup>臣従させるため、秀吉は“朝日姫”を家康公の<sup>けいしつ ごさい</sup>継室(後妻)としました。朝日姫とは秀吉からみてどのような関係の女性でしょうか？

- (1) 実の妹 (2) 妻 <sup>ね ね</sup> 寧々の妹  
(3) 姉 <sup>とも</sup> 智の娘 (4) 弟 <sup>ひでなが</sup> 秀長の娘

## 解説

家康公に対し、大坂に出向いて臣下の礼を取るよう幾度も働きかけた秀吉でしたが、なかなか腰を上げない家康公に対して無理やり縁戚関係を結ぼうと考え送り出したのが、実の妹である朝日姫でした。年齢は家康公より一つ年下だったとされていますが、夫と離縁させられ、<sup>こしい</sup>浜松に輿入れさせられたのです。家康公はそれでも<sup>ていじゆう</sup>丁重に受け入れたと伝えられます。半年後には家康公上洛の安全の保障として、<sup>おおまんどころ</sup>実母の大政所も岡崎城に送られ、その時に母娘の対面をしたと伝えられます。その後、京都に戻り、天正18年(1590)正月に聚楽第で息を引き取りました。家康公はその菩提を弔うために東福寺に南明院を建立しました。



朝日姫 肖像(南明院 蔵/京都市東山区)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題54

天正14年(1586)10月、秀吉は母の大政所<sup>おおまんどころ</sup>を岡崎城に送ります。これを受け、とうとう家康公は秀吉の許<sup>もと</sup>に出向き、諸大名の前で“臣下の礼”<sup>しん かの</sup>をとりましたが、その場所はどこだったのでしょうか？

- (1) 大坂城 (2) 京都御所 <sup>ごしよ</sup>  
(3) 二条城 (4) 伏見城 <sup>ふしみ</sup>

## 解説

天正14年(1586)9月、秀吉は家康公へ上洛を求める使者を送ります。「三河物語」によればこの段階でも多くの家臣は反対していましたが、家康公はそれでも上洛を決定したと記されます。10月、秀吉は家康公の上洛が遅いことから、<sup>おと</sup>実母の大政所を朝日姫の見舞い(人質)として岡崎城へ送り、家康公はこれを受け、岡崎を出立しました。10月26日、<sup>ひでなががてい</sup>豊臣秀長邸に宿泊します。その夜、秀吉が訪れ酒を酌み交わしたことが「家忠日記」に記されています。翌27日、大坂城で家康公が秀吉に謁見、<sup>えつけん しんじゅう</sup>臣従を誓いました。その際、諸大名の前で「陣羽織を着させません」といったパフォーマンスを披露した逸話などが残されています。



大政所 肖像(大徳寺 蔵/京都市北区)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題55

天正14年(1586)、家康公は五ヶ国経営を円滑に行うため、居城を浜松から移しました。家康公の新たな居城はどれでしょうか？

- (1) 甲府城 (2) 新府城  
(3) 駿府城 (4) 松本城

## 解説

天正13年(1585)、家康公により駿府城は近世城郭として新たな築造が始まりました。この時に初めて天守が造営されたといえます。そして翌天正14年(1586)に家康公は自身が17年間過ごした浜松城から新しい駿府城に移ったのです。これは五ヶ国の統治を進めるうえで、最も適した場所であったからと考えられています。その後、天正18年(1590)、北条氏の滅亡に伴い、秀吉の命によって家康公の関東移封が行われ、新たな徳川領国と接する駿府城には豊臣大名の中村一氏が入城しました。後に大御所として江戸を離れた家康公が終の棲家としたのはこの駿府城であり、三重の堀を巡らした大改築も行われたのです。



駿府城石垣の模型(駿府城東御門展示/静岡市)

解答… (3)

## 問題56

天正18年(1590)、秀吉に臣従しない関東の後北条氏は秀吉の「小田原征伐」により取り潰しとなりました。この北条氏初代の北条早雲は戦国大名の始まりともいわれますが、生前の氏名は何だったのでしょうか？

- (1) 伊勢宗瑞 (2) 今川氏親  
(3) 斎藤道三 (4) 北条高時

## 解説

通称は伊勢新九郎と呼ばれています。一介の素浪人から戦国大名にのし上がった下剋上の申し子とされてきましたが、近年の研究では室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏を出自とする考えが認められているようです。この伊勢宗瑞は伊勢一族のうちで備中国(岡山県)を所領とした支流であり、備中または京都で生まれたとされます。また、父の盛定は、8代将軍 足利義政の政所執事として影響力を持った伊勢貞親の妹婿であるとも考えられ、この出自のもとに伊豆国、相模国で力を伸ばしながら後北条氏支配の基を作り上げました。なお、北条早雲という名は、伊勢宗瑞の死後に付けられたとされています。



北条早雲像  
(小田原駅前/神奈川県小田原市)

解答… (1)

## 問題57

北条氏が降伏すると、家康公は東海五ヶ国から関東八ヶ国への国替えを命じられました。このとき、西国から関東への入口となる東海道の要衝、小田原城を任された家臣はだれでしょうか？

- (1) 大久保忠世 (2) 鳥居元忠  
(3) 平岩親吉 (4) 本多忠勝

## 解説

大久保忠世は家康公より10歳年長です。永禄6年(1563)の「三河一向一揆」や元龜3年(1572)12月の「三方ヶ原の戦い」他に参陣し、様々な武功を挙げています。特に「三方ヶ原の戦い」では、敗戦後に味方を励まそうと、天野康景とともに犀ヶ崖に陣をひいた武田軍を夜襲し大混乱に陥れたとされています(三河物語)。また、天正3年(1575)の「長篠の戦い」でも、弟の忠佐、成瀬正一らと共に馬防柵の前に出て勇敢に戦った様子が合戦屏風に描かれます。後に二俣城主に抜擢されますが、武田氏との最前線でもあり、家康公からの厚い信頼があったことが判ります。要衝である小田原城を任せられたのも頷けます。



大久保忠世 肖像  
(小田原城 蔵/神奈川県小田原市)  
出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題58

江戸湾に注いでいた利根川の流れを太平洋に注ぐように付け替える大工事に着手するなど、関東の治水・利水事業に大きな貢献をした家臣はだれでしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 伊奈忠次  
(3) 大久保長安 (4) 彦坂元正

## 解説

伊奈忠次は、父が三河一向一揆で門徒側にと与したため父とともに追放されていましたが、伊賀越えのころ帰参を赦され(異説あり)、以来、家康公の家臣として五ヶ国の検地奉行や、三河・遠江・駿河国の代官頭などの要職を務めました。さらに、家康公が江戸に移封された後は関東代官頭として大久保長安、彦坂元正、長谷川長綱らと共に徳川家の関東支配に貢献します。忠次本人も武蔵国足立郡小室(現・埼玉県北足立郡伊奈町小室)および鴻巣において1万石を与えられ、関東を中心に各地で検地、新田開発、河川改修を行いました。利根川東遷事業や知行割などその業績は計り知れません。



伊奈忠次 像  
(備前堀/茨城県水戸市)

解答… (2)

## 問題59

文禄元年(1592)、秀吉による朝鮮出兵が開始されました。この頃から家康公の側近として、参謀とも軍師ともいわれるような働きをしたといわれる家臣はだれでしょうか？

- (1) 土井利勝 (2) 藤堂高虎  
(3) 内藤清成 (4) 本多正信

## 解説

本多正信は天文7年(1538)、本多俊正の二男として三河国で生まれ家康公に仕えました。永禄6年(1563年)に三河一向一揆が起こると、一揆方の武将として弟の正重と共に家康公に敵対しました。一揆衆が家康公によって鎮圧されると、三河国を出奔して加賀国に住したと伝えられます。伊賀越えのころに大久保忠世のとりなしで徳川家に帰参を赦され、以後は側近としての活躍が見られるようになりました。家康公が秀吉に臣従した際には、他の重臣たちと共に官位を与えられ、従五位下 佐渡守に叙任されています。家康公が将軍となり様々な政策を打ち出す際には、常に正信と相談をしたとも伝えられます。



本多正信 肖像  
(加賀本多博物館 蔵/石川県金沢市)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題60

家康公は熱心に治世を学びました。京都の相国寺で修業し、文禄2年(1593)江戸に招かれて家康公に「貞観政要」を講じたという著名な儒学者はだれでしょうか？

- (1) 新井白石 (2) 木下順庵  
(3) 林 羅山 (4) 藤原惺窩

## 解説

藤原惺窩は相国寺に学ぶ禅僧の立場で、中国の朱子学を取り入れた学問の世界を育み上げた人物です。いわゆる「京学派」と呼ばれる儒教の考えは、朱子学に陽明学も取り込み、幅広い儒教思想を提唱しました。惺窩は近世儒学の祖といわれ、門弟のなかでも特に林羅山は優れた存在でした。家康公だけでなく豊臣秀吉にも儒学 — 特に「貞観政要」(唐の「太宗」の言行録に学ぶ治世の書)を講じており、その優れた内容から家康公には仕官することを要請されたのですが、辞退し、代わりに門弟の林羅山を推挙したと伝えられます。羅山は惺窩の教えを広く展開し、朱子学を幕府の学問(官学)としました。



藤原惺窩 肖像/渡辺華山筆  
(東京国立博物館 蔵/東京都台東区)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題61

慶長<sup>けいちょう</sup>3年(1598)、秀吉<sup>のこ</sup>が遺した「豊臣秀吉遺言<sup>ゆいごんおほながき</sup>覚書」に記された内容と異なるものはどれでしょうか？

- (1) 五大老は遺言を守り互いに婚姻関係を結び連帯を強めること。
- (2) 家康公に大坂城を任せること。
- (3) 五奉行のうち、三人を伏見に置くこと。
- (4) 秀頼が大坂城に入城するときには大名たちの妻子も大坂に移すこと。

## 解説

「豊臣秀吉遺言覚書」は慶長3年(1598)8月、死の二週間ほど前に秀吉の残した「遺言」のメモのようなものです(早稲田大学図書館蔵)。この内容から、秀吉が自分の死後、何よりも秀頼の安泰と豊臣家の政権維持を願っていたことを読み取ることができます。そのために五大老が仲間割れすることなく、一致団結して秀頼を守ることを求めています。さらに大老の筆頭である家康公には、伏見城に入って豊臣政権の運営を任せることが記されていますが、一方で伏見に三人の奉行を置くことなど、そんな家康公を警戒する内容も見て取れます。秀吉の焦りが伝わってくるようです。



伏見城 松の丸の図／「絵本太閤記」

出典：ウィキメディア・コモンズ

## 問題62

次のなかで、豊臣政権の五大老に入らないのはどれでしょうか？

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| (1) 上杉景勝 <sup>かげかつ</sup> | (2) 伊達政宗 <sup>だてまさむね</sup>  |
| (3) 前田利家 <sup>としいえ</sup> | (4) 毛利輝元 <sup>もうりてるもと</sup> |

## 解説

五大老は、豊臣家の政治をつかさどっていたとされていますが、実際は幼い秀頼を守護するというのがその狙いでした。主に秀吉旗下についた大大名によって構成されています。前田利家は織田信長時代からともに織田家で戦って来た盟友ですが、そのほかは戦をしながら和睦を行って豊臣政権下に組み込まれていった実力者です。伊達政宗は小田原の陣で初めて敵対しないことを明らかにした人物でしたから、秀吉からの信頼はさほどはなかったと考えてよいでしょう。秀吉は五大老という制度を作ることによって、有力大名を互いにけん制させ、豊臣家の転覆を防ごうとしたものだと考えられています。



伊達政宗公 騎馬像(仙台城跡／宮城県仙台市)

## 問題63

家康公は文教政策の一環として活字出版に取り組み、慶長4年(1599)に最初の木活字版の書籍が出版されました。この木活字版は何と呼ばれるでしょうか？

- (1) 江戸版 (2) 駿河版  
(3) 難波版 (4) 伏見版

## 解説

伏見版とは、江戸時代初頭に家康公の命により、京都伏見学校の中に建立された円光寺(現・京都市左京区)で造られた木活字版のことです。円光寺版とも呼ばれています。武士たちへの教育を推し進めようと考えた家康公は、足利学校第9世の閑室(三要)元佶を招いて伏見学校を創建しました。伏見版の書籍は、元佶が出版した「六韜」「三略」が最初であるとされ、慶長5年(1600)には、西笑承兌により「貞観政要」が出版されています。また慶長10年(1605)には、やはり西笑承兌により、「吾妻鏡」と「周易」が出版されています。家康公の遺言にある「天下は一人の天下の非ず」の一節は「六韜」からの引用です。



円光寺 奔龍庭と瑞雲閣(京都市左京区)

## 問題64

慶長5年(1600)、オランダのリーフデ号に乗って豊後(現在の大分県)に漂着したウィリアム・アダムスに関する記載について、正しいのはどれでしょうか？

- (1) キリスト教の布教に來日したイエズス会の宣教師であった。  
(2) 慶長遣欧使節団の一員としてヨーロッパへ渡航した。  
(3) 長崎出島の初代オランダ館長を務めた。  
(4) 家康公の命令で西洋式の帆船を始めて建造した。

## 解説

オランダの商船リーフデ号の乗組員だったイギリス人ウィリアム・アダムスは、オランダ人航海士であったヤン・ヨーステンと共に家康公に謁見、その誠実な話しぶりが気に入られて江戸に下向しました。家康公は外国使節との対面や外交交渉に際して通訳を任せたり、助言を求めたりしたのです。やがて西洋式帆船の建造を要請されアダムスは、伊東に日本で初めての造船ドックを設けて80tの帆船を建造。慶長12年(1607)には120tの大型船舶を完成させたのです。家康公はアダムスを250石取りの旗本に取り立て、三浦按針の名乗りを与えました、「青い目のサムライ」が誕生したのです。



アダムスの住居となった浄土寺  
(神奈川県横須賀市)

## 問題65

慶長5年(1600)の「関ヶ原の戦い」への序章となった「会津征伐」ですが、豊臣政権に対する反逆とみなしたのは次のどの出来事でしょうか？

- (1) 上杉景勝が豊臣政権での役職を勝手に返上に、新たな領国の会津に帰国したこと。
- (2) 上杉景勝が堀秀治の治める旧領の越後に攻め入り年貢を奪ったこと。
- (3) 上杉景勝が軍備増強等に関わる家康公からの詰問に対し、挑発的な書状を送り返し反意を示したこと。
- (4) 上杉景勝が大名間での婚姻を五大老五奉行の許可なく勝手に結んだこと。

## 解説

慶長5年(1600)2月、越後領主堀秀治が上杉景勝謀叛の兆候を訴えました。五大老筆頭の家康公は側近の僧西笑承兌に「謀叛の噂がある」として早期の上洛を勧める手紙を書かせ、伊奈昭綱と河村長門(増田長盛臣)に託します。これに対し、上杉家家老の直江兼続は4月14日付で上洛を拒絶する手紙を送り、尚且つ家康公を愚弄したことから会津攻めが決定的となったのです。これが有名な「直江状」ですが、近年はその内容について後世に偽作であるとか、存在そのものが疑わしいなどの説も出されています。



直江兼続 肖像  
(米沢市上杉博物館 蔵/山形県米沢市)  
出典：ウィキメディア・コモンズ

解答… (3)

## 問題66

慶長5年(1600)6月、家康公が率いる会津征伐軍が大坂城を出立すると、石田三成ら反家康勢力が決起し、鳥居元忠や内藤家長らが守る「伏見城」が攻撃されました。この「伏見城の戦い」で、元忠、家長らとともに討死した家臣は次のなかでだれでしょうか？

- (1) 大久保忠佐
- (2) 蜂屋貞次
- (3) 深溝松平家忠
- (4) 本多広孝

## 解説

「家忠日記」の著者として著名な深溝松平家忠は、「伏見城の戦い」で鳥居元忠らと共に玉砕しました。関東移封で、忍(埼玉県行田市)に移った家忠でしたが、子孫は関ヶ原後、深溝に戻り、そして5ヶ所の転封を経て、最終的には肥前島原藩(長崎県島原市)で100年を治め、明治を迎えています。しかし、珍しいことに、島原藩主松平家の当主は、亡くなった場所に関わらず、初代からすべて三河深溝の菩提寺本光寺に埋葬されたのです。大名の菩提寺は江戸と国元、本貫地(発祥地)など複数あるのが一般的で、極めて特異なかたちといえます。現在、墓所の整備が進み、今後は地域資源としての活用も望まれています。



深溝松平家の菩提寺「本光寺」東廟所  
(愛知県幸田町深溝)

解答… (3)

## 問題67

伏見城陥落の知らせを聞いた家康公は下野国小山にて評定を開き、引き返して石田三成らと戦うことを決めます。この会議での発言の功績により、後に家康公より土佐20万石を与えられた豊臣恩顧の武将はだれでしょうか？

- |          |          |
|----------|----------|
| (1) 加藤清正 | (2) 田中吉政 |
| (3) 福島正則 | (4) 山内一豊 |

## 解説

山内一豊はもともと織田信長に仕え、元亀元年(1570)、「姉川の戦い」で功を挙げました。のちに羽柴秀吉の配下として中国征伐に従い毛利氏とも戦っています。天正13年(1585)、若狭国高浜1万9800石を与えられ、後に羽柴秀次の宿老として長浜2万石を領しました。さらに1万石を加えられ、天正18年(1590)9月には小田原征伐の功により遠江国掛川5万石に封じられたのです。慶長5年(1600)の「関ヶ原の戦い」には東軍に属し、戦後は土佐高知20万石に封じられ土佐守に任じられました。一豊の妻の「内助の功」の逸話は有名ですね。小山評定については、その内容が後世に創作されたものという説もあり、今後の研究が待たれます。



山内一豊 騎馬像  
(高知城公園／高知市)

## 問題68

関ヶ原での石田三成ら西軍との決戦において、松平忠吉(家康公四男)とともに先陣を切った家臣はだれでしょうか？

- |          |            |
|----------|------------|
| (1) 青山忠成 | (2) 井伊直政   |
| (3) 酒井家次 | (4) 久松松平康元 |

## 解説

関ヶ原合戦当日、井伊直政と松平忠吉が福島正則隊を出し抜いて攻撃を仕掛け、一番槍を挙げたという有名な逸話が残されています。ただし、この時の状況については多くの二次的な史料でその内容が異なるため、現在では真偽のほどが疑われているのも事実です。「黒田家譜」では、直政と忠吉のおよそ300名ほどの軍勢が、福島隊の中を「物見」と称して通り、結果、先手を仕掛けて功を挙げたとしていますが、「関ヶ原軍記大成」という史料では、彼らは福島隊の前を通り4,500名ほどで先手を仕掛けたと記されます。いずれにしろ、軍法では合戦時の抜け駆けは厳禁とされており、その実態は明らかではありません。



松平忠吉・井伊直政 陣跡(岐阜県関ヶ原町)

## 問題69

関ヶ原の決戦に遅参した徳川秀忠(家康公三男)の徳川本隊に配属されていた徳川四天王のひとりは何だれでしょうか？

- (1) 井伊直政 (2) 酒井忠次  
(3) 榊原康政 (4) 本多忠勝

## 解説

榊原康政は、関ヶ原の合戦時は主力の徳川秀忠軍に戦目付として従軍し、中山道を通して美濃国を目指しました。途中、信濃国上田城の真田昌幸を攻めますが、家康公からの進発命令を携えた使者が荒れた天候のために遅れ、真田攻めを中止し、急いで美濃に向かったもののやはり荒天で、秀忠とともに合戦に遅参することになってしまいました。「藩翰譜」によれば、家康は秀忠の失態に激怒しましたが、康政のとりなしで事なきを得て、伏見城での対面が許されました。秀忠は康政に大いに感謝したと伝えられます。



榊原康政所用南蛮胴具足  
(東京国立博物館 蔵)

解答… (3)

## 問題70

「関ヶ原の戦い」において、結城秀康(家康公二男)の果たした役割は何だったのでしょうか？

- (1) 宇都宮城にて会津の上杉景勝の南下と常陸の佐竹義宣の動きを抑えた。  
(2) 関ヶ原にて本宮山に陣取る毛利勢、長宗我部勢の出陣を抑えた。  
(3) 大坂城にて豊臣秀頼の動向を監視した。  
(4) 別動隊(徳川本隊)に同行し、弟の秀忠を補佐した。

## 解説

小山評定の結果、家康方に属した諸将は反転して、石田三成らの西軍と一戦交える決断を下します。この時に、上杉景勝や佐竹義宣の動きを抑えるため宇都宮に残るよう命じられたのが、家康公の二男である結城秀康でした。徳川実記によれば、秀康は自分も西軍と戦いたいと懇願しますが、強力な上杉を抑えられるのは秀康しかないと諭され、了承したと記されます。家康公が秀康を大いに認めていたことは、戦後、秀康が越前北ノ庄68万石余に大幅加増されたことに表われています。秀康は旧来の結城家とは離脱する形で越前に移り、松平姓を許されたとされます。



結城秀康 騎馬像(福井城跡/福井市)

解答… (1)

## 問題71

「関ヶ原の戦い」の戦後処理で、誤っているのは次のどれでしょうか？

- (1) 関西や関東・東海道などの要衝は、概ね徳川一門や譜代大名で固められた。
- (2) 東軍に味方した豊臣恩顧の大名は軒並み加増されたが、概ね中国地方や四国・九州など遠隔地へ移封された。
- (3) 先陣の功を挙げた家康公の四男 松平忠吉が最も加増され、越前67万石が与えられた。
- (4) 井伊直政は高崎から近江佐和山に移封され、西国の抑えと有事の際の朝廷の守護の役目が与えられた。

## 解説

「関ヶ原の戦い」に勝利した家康公による新たな大名配置の特徴は、畿内や東海道などの要衝は徳川一門や準一門といえる家康の女婿、および譜代大名でことごとく固められたことでしょう。先の家康公二男 秀康は北陸道を押さえる越前一国、四男 松平忠吉は東海道を押さえる尾張一國、次女 督姫を娶った池田輝政は西国と畿内を結ぶ播磨一國が与えられました。さらに井伊直政を近江佐和山に封じたのを始め、東海道・中山道筋や畿内には譜代大名を加増して入封させ、江戸の防衛と豊臣氏および西国外様大名を監視させたのです。



井伊家の居城 彦根城天守  
(滋賀県彦根市)

## 問題72

京都の治安維持のため、慶長6年(1601)から元和5年(1619)まで、20年近くにわたり京都所司代を務め、手腕を発揮した家臣は次のうちどれでしょうか？

- (1) 板倉勝重
- (2) 藤堂高虎
- (3) 長谷川藤広
- (4) 湯浅作兵衛

## 解説

板倉勝重は、三河国額田郡小美村(岡崎市)の出身です。幼少時に出家しましたが、父と家督を継いだ弟が戦死したことから還俗し、板倉家を継いでいます。駿府町奉行、江戸町奉行などを経て、慶長6年(1601)、京都所司代に任命されました。家康公が天下人として主に伏見で政務をとった期間は京都にあり、第107代 後陽成天皇、第108代 後水尾天皇(慶長16年(1611)5月に即位)在位中の朝廷との調整や、大坂城の監視、京都の治安維持などに重要な役割を果たしました。訴訟においても、的確で柔軟な裁定をする名奉行と謳われ、板倉勝重・重宗父子の京都所司代在職中の施政の大意は後年『板倉政要』として纏められています。



板倉勝重 肖像/長圓寺 蔵  
(愛知県西尾市)

出典：ウィキメディア・コモンズ

## 問題73

慶長6年(1601)、家康公は東海道をはじめ、江戸の日本橋を起点とする街道の整備に着手し、2代将軍秀忠の時代に五街道として定められました。次のうち、五街道に定められた街道はどれでしょうか？

- (1) 奥州街道 (2) 山陽道  
(3) 北国街道 (4) 水戸街道

## 解説

奥州街道は五街道の一つで、江戸から陸奥白河へ至る街道です。江戸と陸奥国との物流の中継点として賑いました。現在の福島県白河市には、古代より「白河の関」が設けられ、奥州の玄関口と位置付けられました。西行や松尾芭蕉など多くの文人が訪れ、歌や俳句を作っています。なお五街道は、江戸日本橋を起点とする東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道の五つを指しました。家康公は、関ヶ原の戦い以降、街道の整備に着手しています。各宿場に伝馬の常備を命じ、道の拡張や一里塚の設置などを行いました。2代将軍秀忠の時代には、街道の警備のため、要所に関所を設置しています。



奥州街道の終着地に建つ白河小峰城の復元三重櫓(福島県白河市)

解答… (1)

## 問題74

「関ヶ原の戦い」に勝利し、全国の主要な鉱山を手にした家康公は金山、銀山の開発を進めます。この金山、銀山の開発・採掘に手腕を発揮し、代官頭として大きな成果を挙げた家臣はだれでしょうか？

- (1) 安藤直次 (2) 伊奈忠次  
(3) 大久保長安 (4) 成瀬正成

## 解説

大久保長安は、猿楽師(現在の能楽師)の子として生まれ、武田信玄に取り立てられました。武田家滅亡後は、家康公の家臣として頭角を現します。大久保忠世の嫡男 忠隣の庇護を受け、姓も大久保と改めています。関東代官頭などを務めた後、家康公から全国の金銀山の統括を命じられました。中でも佐渡金山は、当時、世界最大級の金山であり、慶長小判の材料を供給する最重要の鉱山でした。長安は、「天下の総代官」と呼ばれ、大名と姻戚関係を結ぶなど絶大な権勢を誇りましたが、金銀採掘量の低下もあり影響力は衰えていきます。享年69歳。死後に不正蓄財が暴かれ、大久保長安家は断絶となりました。



史跡「佐渡金山／宗太夫坑」人形で再現された当時の採掘の様子(新潟県佐渡市)

解答… (3)

## 問題75

金銀の採掘量の増加を受け、家康公は、金・銀・  
 銭の三貨からなる貨幣制度(三貨制度)を設けまし  
 た。家康公の命を受け小判の鑄造を行ったのは次  
 のうちどれでしょうか？

- (1) 後藤庄三郎 (2) 角倉了以  
 (3) 田中勝介 (4) 茶屋四郎次郎

## 解説

後藤庄三郎は、元々、京都の後藤家の職人でした。後藤家は御用金匠であり、茶屋四郎次郎、角倉了以と共に京の三長者と呼ばれるほどの家でした。庄三郎は家康公から手腕を認められ、小判の鑄造を命じられます。貨幣として流通させるため、大判とは別に一両小判を製造させたのです。庄三郎は、江戸本町に小判の「極印」を打つ後藤役所を設けました。極印とは金貨の精度を保証するための印です。場所は、現在の日本橋本石町、日本銀行本店の場所です。当初は、京都、駿府、佐渡にも出張所を設け、極印打ちを行いました。後藤役所は金座と呼ばれ、当主の座は江戸期を通じて代々後藤家が世襲しています。



「慶長小判」慶長6年(1601)より  
 発行された一両小判

解答… (1)

## 問題76

慶長8年(1603)、家康公は征夷大將軍に任命されました。次のうち、過去に征夷大將軍に任命された人物はどれでしょうか？

- (1) 阿部比羅夫 (2) 平将門  
 (3) 源頼朝 (4) 日本武尊

## 解説

源頼朝は、久安3年(1147)、源義朝の三男として現在の名古屋市熱田区で生まれました。義朝の正室由良御前は、熱田神宮の大宮司藤原季範の娘で、熱田の実家において頼朝を出産したのです。建久3年(1192)、頼朝は征夷大將軍に任官しました。元々、征夷代將軍は蝦夷征伐のための臨時的官職でした。歴代の征夷大將軍の中では坂上田村麻呂(758~811)が最も有名です。田村麻呂は、平安時代の初め、蝦夷の指導者阿弭流為との戦いに勝利し、勇名を馳せました。頼朝以降は、「武士の棟梁」としての意味合いを持ち、征夷大將軍を頂点とする武家政権のことを幕府と呼んだのです。



源頼朝像 / 源氏山公園(神奈川県鎌倉市)

解答… (3)

## 問題77

慶長9年(1604)、家康公は「朱印状」を発行して海外との交易を行う「朱印船貿易」を始めました。この朱印船貿易が最も活発に行われた地域は次のうちどこでしょうか？

- (1) マカオなど中国の沿岸都市
- (2) ゴアなどインドの沿岸都市
- (3) スペインの植民地 メキシコ
- (4) 安南、シャムはじめ東南アジア諸国

## 解説

朱印船貿易は、安南、シャムはじめ東南アジア諸国との間で最も活発に行われました。安南は現在のベトナム、シャムはタイです。朱印船貿易の活発化に伴い、アジア各地に日本人町が作られました。当時、海外で活躍した日本人として有名な山田長政は駿河出身といわれ、1612年、長崎から台湾経由でシャムに渡っています。当初は日本人傭兵隊に加わっていましたが、アユタヤの日本人町の頭領となります。スペイン艦隊のアユタヤ侵攻を撃退するという功績をあげました。なお、家康公は伽羅などの香木収集が趣味で、東南アジアから輸入した香木で聞香を楽しみました。



「復元朱印船模型」/  
国立歴史民俗博物館 蔵(千葉県佐倉市)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

## 問題78

慶長10年(1605)、家康公は朝鮮の松雲大師(惟政)と面会し、「文禄・慶長の役(朝鮮出兵)」で途絶えていた国交回復の足掛かりとしました。松雲大師の説明として正しいのはどれでしょうか？

- (1) 李氏朝鮮国 第14代の王 宣祖の親族であった。
- (2) 士大夫と呼ばれる優れた高級官僚(文官)のひとりだった。
- (3) 僧であり、戦時は秀吉軍と戦った義僧兵の総指揮官だった。
- (4) 朝鮮への窓口である対馬の大名 宗氏の一族であった。

## 解説

松雲大師(惟政)は、僧であり、文禄・慶長の役で秀吉軍と戦った義僧兵の総指揮官でした。朝鮮国王の宣祖が僧たちにも抗日戦を命じたのです。文禄の役の際には、敵将である加藤清正と講和交渉を行い、信頼関係を築きました。戦後、朝鮮は、日本の武士の間でも名を知られた松雲大師を「探賊使」として派遣しました。家康公との会談で国交回復の糸口を作り、数千人の朝鮮人捕虜返還を実現するという大きな功績を上げたのです。日本滞在中は、京都相国寺の西笑承兌や、対馬宗氏の外交僧である景轍玄蘇らと漢詩の応酬を行うなど交流を深めました。



「耳塚」/慶長の役で戦功の証として削いで持ち帰った朝鮮・明国兵の耳や鼻を葬った塚(京都市東山区)

## 問題79

慶長10年(1605)、家康公は將軍職を三男の秀忠に譲りました。2代將軍 秀忠の母はだれだったでしょうか？

- (1) 於愛(西郷の局) (2) 於江(崇源院)  
 (3) 於静(浄光院) (4) 瀬名(築山殿)

## 解説

2代將軍 秀忠の母は於愛の方(西郷の局)です。東三河の武将である西郷義勝の妻となりますが、義勝が戦死。その後、家康公の側室となり、公の三男 長丸(秀忠)、四男 福松丸(松平忠吉)を産みました。人柄が良く、周囲に分け隔てなく接したことから、多くの人に慕われたと伝えられます。天正17年(1589)に亡くなると、駿府の龍泉寺に葬られました。後の寛永5年(1628)、大御所秀忠は大伽藍を建立し、龍泉寺を宝台院と改めました。浄土宗宝台院は、駿府における徳川家の菩提寺となります。幕末には、最後の將軍徳川慶喜が江戸開城後、同寺で謹慎しています。



西郷の局 肖像／宝台院 蔵(静岡市)

出典：ウイキメディア・コモンズ

解答… (1)

## 問題80

慶長12年(1607)、駿府城に移った家康公は、駿府奉行衆に支えられて大御所政治を行いました。次のなかで駿府奉行衆に含まれていないのはだれでしょうか？

- (1) 大久保忠隣 (2) 成瀬正成  
 (3) 本多正純 (4) 村越直吉

## 解説

大久保忠隣は、江戸奉行衆として2代將軍 秀忠を支えました。天文22年(1553)、三河国額田郡上和田(岡崎市)に生まれています。曾祖父は松平清康に仕えた大久保忠茂(宇津より改姓)、父は徳川十六神将の大久保忠世です。叔父に『三河物語』で有名な大久保忠教(彦左衛門)がいます。忠隣は、家康公のもとで数々の武功を挙げ、文禄2年(1593)、徳川秀忠付きの家老となりました。慶長15年(1610)には老中に就任、秀忠政権の有力者となります。しかし、その4年後、忠隣はいきなりの改易を申し付けられました。理由については諸説がありますが、累代の功績により家は存続。孫の忠朝のときに小田原藩主に返り咲いています。



大久保家が明治まで代々藩主を務めた小田原城(神奈川県小田原市)

解答… (1)

## 問題81

家康公は、大御所時代を通じて豊臣家との関係に腐心しました。豊臣家の家督を継いだ豊臣秀頼について正しいのは次のうちどれでしょうか？

- (1) 太閤 豊臣秀吉の長男である。
- (2) 生涯一度も大坂城を出たことがなかった。
- (3) 家康公の孫娘 千姫を正室に迎えた。
- (4) 母や家臣の反対を押し切り、「大坂冬の陣」の開戦に踏み切った。

## 解説

豊臣秀頼は、家康公の孫娘 千姫を正室に迎えました。秀頼は、秀吉が57歳のとき、側室の茶々(淀殿)との間に儲けた子です。秀吉は、既に甥の秀次を後継者に決めていましたが、秀次から閑白の職を奪い自刃させてまで、秀頼を後継の座に据えました。さらに、自らの死後、秀頼の地位を盤石なものとするため家康公の孫娘を嫁がせるよう遺言しています。家康公は、慶長8年(1603)、幕府を開いた半年後に婚姻を実現させました。仲が良かったと伝えられる二人ですが、慶長20年(1615)「大坂夏の陣」において、秀頼は自刃、千姫は大坂城から戦火の中を救出されるという劇的な別れとなりました。



豊臣秀頼 肖像/養源院 蔵(京都市東山区)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

## 問題82

「徳川」対「豊臣」の「大坂冬の陣」のきっかけとなったのが慶長19年(1614)の「方広寺鐘銘事件」でした。豊臣方として同事件の交渉にあたったのは、次のうちどれでしょうか？

- (1) 大野治長
- (2) 織田有楽斎
- (3) 片桐且元
- (4) 真田信繁(幸村)

## 解説

片桐且元は、豊臣家の重臣として「方広寺鐘銘事件」の交渉に当たりました。以前より、朝廷や徳川家との調整、寺院復興事業など諸般にわたり豊臣家を差配していたのです。慶長16年(1611)、二条城における家康公と豊臣秀頼の会談にも同席しています。方広寺事件の調停案を持ち帰った且元は、徳川方との内通を疑われ、暗殺計画まで取り沙汰される事態となり、大坂城を退去します。大坂の陣では、徳川方として参戦しましたが、夏の陣が終わると、程無くして京都で病死しています。明治期に入り、坪内逍遙が作った新歌舞伎『桐一葉』は、且元の苦渋と悲劇を描いて人気を博しました。



片桐且元 肖像/大徳寺玉林院 蔵(京都市北区)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

## 問題83

「大坂冬の陣」と翌年の「大坂夏の陣」で豊臣氏を滅ぼした家康公は、争いのない社会を築くため、「武家諸法度」「禁中並公家諸法度」「寺院諸法度」を制定しました。これら諸法度を起草した中心人物はだれでしょうか？

- (1) 以心崇伝 (2) 西笑承兌  
(3) 神龍院梵舜 (4) 南光坊天海

## 解説

以心崇伝は、臨濟宗の僧です。京都の南禅寺の塔頭である金地院に住したため、金地院崇伝とも呼ばれました。「武家諸法度」などの諸法度を起草しています。家康公に仕えたのは、慶長13年(1608)、駿府に招かれて外交事務等を担当したときからです。全国の寺院を統べる仕事も行いました。慶長18年(1613)には、有名な「伴天連追放之文」を起草しました。古書の収集や銅活字版印刷による「駿河版」刊行などの文化事業も行い、『本光国師日記』や外交関係の記録『異国日記』等を残しています。幕政全般に関与し、権勢の大きさは「黒衣の宰相」と呼ばれるほどでした。



南禅寺塔頭 金地院(京都市左京区)

解答… (1)

## 問題84

元和2年(1616)4月、若き日の志を成し遂げた家康公は波乱の生涯を閉じると、遺言に従い、久能山に埋葬されました。翌年、社殿が建てられ、家康公は神として祀られますが、後に、相殿として二人の武将が併せて祀られています。その二人とはだれでしょうか？

- (1) 大伴弟麻呂と坂上田村麻呂  
(2) 源 頼朝と足利尊氏  
(3) 祖父 松平清康と父 広忠  
(4) 織田信長と豊臣秀吉

## 解説

久能山は、駿河湾を眼下に望む要害の地で、古くは久能寺や武田信玄による久能山城が築かれていました。元和3年(1617)、2代将軍秀忠が建立した久能山東照宮は、わが国初の東照宮であり、荘厳な権現造りの端緒ともなった歴史的建造物です。国宝にも指定されています。江戸時代初期、神仏習合の時代に創建されたため、当初、主祭神の家康公の両脇には仏様が祀られていました。しかし、明治期に「神仏分離令」が出されたため仏様は分離され、代わりに、天下統一に貢献した織田信長、豊臣秀吉の先達二人が相殿として祀られることとなったのです。



久能山東照宮(静岡市)

解答… (4)

## 問題85

家康公の死後、南光坊天海の主張により、家康公の神号が「権現」に決まると、朝廷から次の4つの案が示されました。幕府が選んだのはどれでしょうか？

- (1) 威霊大権現 (2) 東光大権現  
(3) 東照大権現 (4) 日本大権現

## 解説

家康公は、死後「東照大権現」として祀られました。「権現」は神号です。神に奉られる称号であり、神の格式や性格によって呼び名が異なります。以心崇伝は、「明神」号を主張しました。一方、南光坊天海は「権現」号を主張し、結局、將軍秀忠の裁定で「権現」号に決まりました。天海は、豊臣秀吉が豊国大明神として祀られた後、「大坂の陣」で滅んだ例を引き合いに出し、「権現」号を主張したとされます。「東照」は、「東からわが国を照らす」の意だと解されます。久能山東照宮、日光東照宮には、「東照大権現」の扁額が掲げてありますが、いずれも後水尾天皇の御宸筆です。



久能山東照宮の楼門に掲げられた「東照大権現」の扁額(静岡市)

## 問題86

徳川四天王筆頭と称される酒井忠次の子孫は、元和8年(1622)以降、出羽国庄内(現在の山形県北西部)を治めましたが、初めて庄内藩主となったのはだれでしょうか？

- (1) 酒井家次 (2) 酒井重忠  
(3) 酒井忠勝 (4) 酒井忠利

## 解説

酒井忠次を祖とする酒井左衛門尉家は、江戸時代初頭にかけて三河国吉田から下総国臼井、上野国高崎、越後国高田、信濃国松代へと領知替えを命じられています。そして元和8年(1622)、3代酒井忠勝が庄内へと入部しました。なお、同じ時代、左衛門尉家と同族である酒井雅楽頭家にも酒井忠勝という同姓同名の人物がいます。小浜藩藩主で幕府の老中や大老も務めており、どちらの「酒井忠勝」も有名なので、混同しないように注意が必要です。

酒井左衛門尉家は3代忠勝以降、幕末まで庄内を治め、明治時代以降も現在に至るまで庄内に居住し続けています。



酒井忠勝 肖像  
(致道博物館 蔵/山形県鶴岡市)

## 問題87

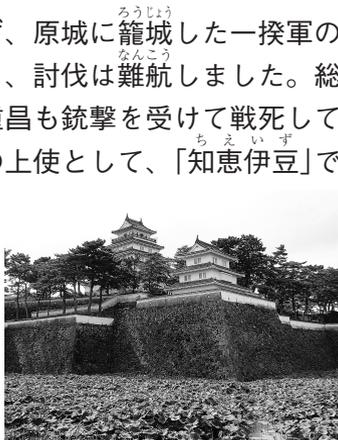
寛永14年(1637)、キリスト教弾圧や圧政に苦しんだ島原・天草の領民が一揆を起こしました。この「島原の乱」鎮定のため、3代将軍 家光により最初に上使として派遣され、九州諸藩を率いて戦った幕臣はだれでしょうか？

- (1) 阿部忠秋 (2) 板倉重昌  
(3) 稲葉正勝 (4) 堀田正盛

## 解説

板倉重昌は、幕府の命により上使として九州諸藩による討伐軍を率いました。重昌は、京都所司代を務めた板倉勝重の二男です。現在の愛知県額田郡幸田町にあった三河深溝藩1万5千石の藩主でした。

討伐軍は統率がとれず、原城に籠城した一揆軍の守りも堅かったことから、討伐は難航しました。総攻撃は失敗に終わり、重昌も銃撃を受けて戦死しています。幕府は二人目の上使として、「知恵伊豆」で有名な老中 松平信綱を派遣し、漸く反乱軍を鎮圧しました。なお、乱鎮圧後の島原藩は主に深溝松平家が歴代藩主を務め、廃藩置県を迎えました。



島原城(長崎県島原市)

解答… (2)

## 問題88

次の幕府の政策のなかで、3代将軍 家光が行ったものではない施策はどれでしょうか？

- (1) 武家諸法度を改訂し、諸大名に「参勤交代」を義務付けた。  
(2) 3度目の朝鮮使節、第1回の琉球使節を受け入れ、両国とは正式に国交を結んだ。  
(3) 家康公が改葬された日光社の大造営をはじめ各地のゆかりの寺社を整備し、幕府の威光を高めた。  
(4) 町火消し、小石川養生所、目安箱などを設置し、江戸町民の暮らしの改善をはかった。

## 解説

町火消し、小石川療養所、目安箱などを設置し、江戸町民の暮らしの改善を図ったのは、8代将軍 吉宗です。町火消しは、幕府の命により、町民によって組織されました。現在の消防団の源流と言われています。小石川養生所は、江戸の下層民対策として幕府が設けた無料の施薬院です。現在の小石川植物園の場所にありました。町民や百姓の要望を聞くために設けられた目安箱は和田倉御門の側に置かれ、投書は将軍自ら検分しました。これらの施策は、「享保の改革」の一環として行われたものです。

3代将軍 家光が眠る  
日光山輪王寺大猷院(栃木県日光市)

解答… (4)

## 問題89

慶安4年(1651)、家光は死に際し、幼い4代将軍家綱の後見を保科正之に託しました。保科正之について、間違っているのはどれでしょうか？

- (1) 慶長16年(1611)、2代将軍 秀忠と側室 於静との間に誕生した。
- (2) 元和3年(1617)、幼くして、会津藩主の保科正光の養子となった。
- (3) 慶安4年(1651)、大政参与に任じられ、家綱を補佐した。
- (4) 子孫は松平を名乗り、明治まで会津藩主を務めた。

## 解説

元和3年(1617)、保科正之は、信濃国高遠藩主である保科正光の養子となりました。正之は、2代将軍 秀忠の庶子(母は妾の於静)で、その存在は、土井利勝など一部の者にしか知られていませんでした。兄に当たる3代将軍 家光は、鷹狩りの最中に立ち寄った寺で偶然に正之の存在を知り、後に高遠藩主、さらには会津藩主に引き立てました。家光は死に際して、嫡男の家綱を頼むと遺言しました。正之は、「会津家訓十五箇条」を制定し、その精神は幕末の松平容保以下の会津藩士に引き継がれました。

なお、生母の於静が側室として扱われるのは、秀忠夫妻や於静の死後のことです。



会津若松城(福島県会津若松市)

## 問題90

保科正之は、4代将軍 家綱を補佐して「文治政治」を行い、江戸平和社会の基礎を築きました。保科正之の政策として正しいものはどれでしょうか？

- (1) 江戸城天守の再建
- (2) 生類憐みの令の公布
- (3) 享保の改革の推進
- (4) 末期養子の禁の緩和

## 解説

保科正之は、末期養子の禁を緩和しました。末期養子とは、嗣子(跡継ぎ)がないままに武家の当主が死去した場合、家が断絶されるため、緊急に縁組された養子のことです。江戸時代初期は、大名の末期養子は禁止されていました。幕府の支配体制を強化する狙いもあったのです。しかしながら、御家断絶に伴い大量の浪人が発生するという問題が生じました。慶安4年(1651年)の「慶安の変」は象徴的な事件でした。軍学者の由井正雪が幕府の転覆と浪人の救済を目指して乱を起こそうとしたのです。こうした時代背景の中、同年12月、保科正之の主導で末期養子の禁が緩和されたのです。



保科正之 肖像/土津神社 蔵  
(福島県猪苗代町)

出典：ウィキメディア・コモンズ

## 問題91

天正3年(1575)、父の戦死(鳶ヶ巣山砦の戦い)により当主になって以降、当時の徳川領国や家康公の動向、家康公家臣の日常生活を知ることができる貴重な史料となっている「日記」を書き記し、子孫は肥前 島原藩主として明治を迎えた家臣はだれでしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 大久保彦左衛門忠教  
(3) 深溝松平家忠 (4) 本多作左衛門重次

## 解説

深溝松平家忠は、三河国深溝(額田郡幸田町)を本拠とする松平一族で、父 伊忠が「鳶ヶ巣山砦の戦い」で戦死したことによって4代目当主となりました。現存する「家忠日記」は天正5年(1577)10月頃から文禄3年(1594)9月頃までに至る18年間、家忠が23歳から40歳までの記録で、信康・築山事件、武田氏との攻防から本能寺の変、秀吉への臣従期まで、当時の政治、経済、社会、文化面に関する幅の広い記録がされており、武家の自筆の日記として大変貴重な文化財です。なお、日記の中で、家康公に対する呼び方が「家康」から「家康様」に変化しており、一族内で、また社会的・政治的に家康公の地位が向上したことがうかがえます。



松平家忠 肖像  
(本光寺 蔵/愛知県幸田町)  
出典: ウィキメディア・コモンズ

解答… (3)

## 問題92

戦場から妻に宛てて送った「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の文。簡潔にして要を得た手紙の見本として知られますが、この文を書き送った家臣はだれでしょうか？(※お仙は仙千代。後の越前 丸岡城主)

- (1) 板倉勝重 (2) 大久保彦左衛門忠教  
(3) 深溝松平家忠 (4) 本多作左衛門重次

## 解説

“日本一短い手紙”として知られるこの一文は、鬼作左とも称され、岡崎奉行衆の一人だった本多作左衛門重次が、天正3年(1575)、「長篠の戦い」の陣中から妻に宛てて書いた手紙だといわれます。この短い文の中には、家を守り、家族を愛し、忠義を尽くす思いが簡潔に込められています。この「お仙」は当時幼子であった嫡男 仙千代のことで、後の慶長18年(1613)、本多成重へと成長した仙千代は、家康公の二男である秀康の長男 松平忠直の付家老として越前丸岡4万石を与えられています。この「お仙」ゆかりの丸岡町(福井県坂井市)では、平成5年から「一筆啓上賞 日本一短い手紙コンクール」が開催されています。



越前丸岡城(福井県坂井市)

解答… (4)

## 問題93

松平家の歴代当主の伝承や自家の活躍を中心に、戦国時代の三河武士団の様子を伝える「三河物語」を書き記した家臣はだれでしょうか？

- (1) 板倉勝重 (2) 大久保彦左衛門忠教  
(3) 深溝松平家忠 (4) 本多作左衛門重次

## 解説

大久保家は古くから松平家に仕え、小田原藩主になった大久保忠世や、沼津藩主になった大久保忠佐も「四天王」と同様に天下の平定に向けて大活躍した家臣です。大久保彦左衛門忠教は忠世や忠佐の弟で、やはり兄たちとともに活躍しました。松平氏の歴史や大久保家の活躍などを記した「三河物語」の作者である彦左衛門は、家康公から旗本として召し抱えられ、三河坂崎(愛知県額田郡幸田町)に1000石を与えられて陣屋を構えたのです。彦左衛門は3代将軍家光の代まで仕え、「天下の御意見番」として大変有名になりました。幸田町では「彦左公園」を整備し、毎年「彦左まつり」を行って顕彰しています。



錦絵「大久保彦左衛門登城之図」  
月岡芳年 画

出典：ウイキメディア・コモンズ

解答… (2)

## 問題94

家康公の家臣 酒井忠次について、間違っている記述はどれでしょうか？

- (1) 妻が松平清康の娘(家康公の父の妹)であり、家康公の義理の叔父にあたる。  
(2) 「海老すくい」の踊りが得意で北条氏政・氏直父子にも披露している。  
(3) 三方ヶ原で敗れ浜松城に逃げ帰った後、櫓の上で太鼓を打ち鳴らし、城に迫った武田軍を退散させたという「酒井の太鼓」伝説が残る。  
(4) 関東移封後は関東総奉行として江戸に留まり、秀忠の補佐を行った。

## 解説

酒井忠次は徳川四天王、徳川十六神将の筆頭に数えられ、家康公より15歳も年長です。妻は、家康公の祖父 松平清康の娘(広忠の妹) 碓井姫といわれ、忠次は家康公の義理の叔父にあたります。「海老すくい」は、伊豆の三島で北条氏政と会見したときの宴席で舞っています。また、「酒井の太鼓」の話は後に歌舞伎演目にまでなっています。家康公から見れば頼りになる「軍師」でしたが、関東移封前に家督を嫡子の家次に譲り、京都桜井屋敷に隠居しています。「関ヶ原の戦い」の時には、忠次はもう亡くなっており、江戸徳川政権を見えていません。



錦絵「酒井の太鼓」を表した「酒井忠次時鼓打之図」  
月岡芳年 画

出典：ウイキメディア・コモンズ

解答… (4)

## 問題95

家康公の家臣 本多忠勝について、間違っている記述はどれでしょうか？

- (1) 家康公と同年に、本多平八郎家の嫡男として三河 岡崎に生まれる。
- (2) 生まれた翌年、父 忠高が戦死し、叔父の忠真に育てられる。
- (3) 穂先に止まった蜻蛉が真っ二つになったという「蜻蛉切」という名の槍を愛用した。
- (4) 生涯57度の戦に臨んだが、かすり傷一つ負わなかったと伝えられる。

## 解説

本多忠勝は天文17年(1548)生まれで家康公より6歳年下です。忠勝と同年生まれに同じ徳川四天王の榊原康政がいます。鹿角脇立兜と名槍「蜻蛉切」で有名な本多忠勝(通称平八郎)は、戦国一の勇将として知られています。家康公のほとんどの戦に出陣し、大活躍をしました。忠勝がケガをしなかった理由は、強かっただけでなく、着用していた鎧や兜が他の武士のものに比べて軽く、動きやすかったからとも考えられています。もう一つ、古い史料などから、忠勝は無理な戦いはずせず、相手に降伏をさせることが上手だったことも分かっています。



画 柄澤照文氏

解答… (1)

## 問題96

家康公の家臣 鳥居元忠について、間違っている記述はどれでしょうか？

- (1) 駿府人質時代のエピソードで、家康公に「百舌を鷹のように飼いならせ」と命じられた。
- (2) 諏訪原城の戦いで左股を銃弾が貫通し、生涯、歩行に障害が残った。
- (3) 関東移封により上総 大多喜に10万石を与えられた。
- (4) 徳川十六神将のひとりに数えられる。

## 解説

鳥居元忠は岡崎奉行を務めた鳥居忠吉の三男で、弟の忠広とともに徳川十六神将に数えられ、その忠節ぶりは「三河武士の鑑」と賞されています。家康公より3歳年上で、今川の人質だった家康公に側近の一人として仕えました。「天正壬午の乱」では、北条氏との「黒駒合戦」に勝利し、戦局を家康公有利に導きました。関東移封の際には、下総矢作(千葉県香取市)四万石を与えられています。「関ヶ原の戦い」の前哨戦「伏見城の戦い」では落城必至の伏見城を預けられ、1,800人の城兵とともに討死を遂げました。



鳥居氏発祥地の碑／渡城址(岡崎市)

解答… (3)

## 問題97

家康公の家臣 平岩親吉<sup>ちかよし</sup>について、間違<sup>まちが</sup>っている記述はどれでしょうか？

- (1) 家康公長男の信康の傅役で、後に九男 義直<sup>よしなお</sup>の傅役を務める。
- (2) 家康公八男の仙千代<sup>せんちよ</sup>を養嗣子<sup>ようし</sup>として賜<sup>たま</sup>る。
- (3) 家康公十男 頼宣<sup>よりのぶ</sup>の付家老<sup>つけかろう</sup>として犬山城主となる。
- (4) 徳川十六神将のひとりに数えられる。

## 解説

平岩親吉は家康公と同じ年で徳川十六神将の一人です。家康公の嫡男 信康が自害を命じられると、傅役である自らの首を信長に差し出すことを申し出ますが処断を防ぐことはできませんでした。世嗣<sup>よつぎ</sup>のいない親吉の跡<sup>あと</sup>を絶やしたくない家康公は、八男の仙千代<sup>せんちよ</sup>を養嗣子<sup>ようし</sup>として与えましたが仙千代は6歳で早世<sup>そうせい</sup>しました。家康公は親吉に九男 義直の傅役を命じ、義直を尾張藩主とすると、その付家老<sup>つけかろう</sup>として犬山城12万3千石を与えています。親吉の後には、成瀬正成が付家老に任じられました。



平岩親吉の墓／妙源寺(岡崎市)

解答… (3)

## 問題98

松平一族の中で、ただ一人、徳川十六神将<sup>しんしゅう</sup>に数えられ、十六神将図<sup>りゅうわき</sup>では酒井忠次とともに家康公の両脇に描かれているのはどれでしょうか？

- (1) 安城松平親忠<sup>あかただ</sup>
- (2) 桜井松平信定<sup>さくらい のぶさだ</sup>
- (3) 長沢松平康忠<sup>ながさわ</sup>
- (4) 深溝松平家忠

## 解説

家臣筆頭の酒井忠次とともに、十六神将図の最上段に家康公の片腕のように描かれている人物は、一般的には長沢松平康忠とされます。康忠は、松平7代 清康の娘(広忠の妹)の碓井姫の嫡男で、広忠の娘 矢田姫を妻に迎えました。家康公とは従弟であり、義弟の関係になります。また、「桶狭間の戦い」で父が戦死すると、母が酒井忠次に再嫁したため、忠次の義理の息子ともなりました。酒井家の嫡男、家次の同腹の兄でもあります。家康公<sup>えんせき</sup>ならびに酒井家と深い縁戚関係をもった長沢松平康忠は、東三河の旗頭で義父でもある酒井忠次の許で、数々の戦を乗り越え、松平一族を代表するかたちで十六神将に加えられたのでしょうか。



徳川十六神将図より松平康忠 肖像  
(法蔵寺 蔵／岡崎市)

解答… (3)

## 問題99

家康公が終の棲家とした駿河国で好んだものの上位3つだという説がある「一富士 二鷹 三〇〇〇」。三番目の〇〇〇に当てはまる駿河名物は何でしょうか？

- (1) 茄子 (2) 鮪 (3) 蜜柑 (4) 山葵

## 解説

初夢にみると縁起がよいとされる「一富士、二鷹、三茄子」の茄子は家康公が好んだ「折戸ナス」と言われています。古くから駿河の三保折戸地区で栽培され、家康公にも献上されていたのですが、明治以降、栽培が途絶えていました。それが、関係者の努力により復活し、2007年より出荷が再開されています。

家康公は贅沢をせず、腹はいつも八分目、冷たい水は口にしない等、現代に通じる健康法をこの時代から実践していたようです。また、ナスをはじめ、旬の食材を口にすることも心掛けていたと伝わります。家康公が天下を収めることができた大きな要因の一つは、やはり健康を保つ食生活だったといえるでしょう。



家康公に献上されたと伝わる「折戸ナス」  
(静岡市清水区)

解答… (1)

## 問題100

「家康公と家臣団」最後の問題です。関白 秀吉から「徳川殿の宝はなにか？」と尋ねられた家康公。何が宝だと答えたのでしょうか？

- (1) 私のすべてのことを気遣ってくれる家族  
(2) 私のためには命を惜しまない家臣たち  
(3) 天下を治めることのできる源氏の家柄  
(4) 戦のない世をつくっていく指針となる古今の蔵書

## 解説

上記の(1)~(4)はすべて家康公の大事な宝と言えますが、大坂城で関白 秀吉から問われ、毛利、宇喜多などの諸大名の前で「我が第一の宝」と答えたのは、“私のためには命を惜しまない家臣たち”でした。豊臣政権下で50代を迎えた家康公には、人こそ宝という概念があったのでしょうか。明日をも知れぬ戦国乱世のなかで、母と離別、父と死別し、人質生活、立志自立、妻子との別れ、敗北と臣従など艱難辛苦の人生において、諫言忠言をくれ、自分の盾となってくれる譜代の家臣たちは、家康公にとってまさに宝だったのです。



家康公 像(岡崎公園/岡崎市)

解答… (2)